

504

100

9 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10<sup>19/m</sup> 1 2 3 4 5

始





トステブバ本日  
史零道傳部西

日本バプテスト西部組合 編輯



504-100



日本バプテスト

西部傳道略史

日本バプテスト西部組合 編纂



大正

11. 10. 30

内交



米國南部バプテスト大會が九州に傳道を開始し  
てより、三十年に達したれば、其の記念として  
本書を編纂し、感謝の微意を表白す。

大正十一年秋

## 序 文

バプテストが九州に傳道を開始して此處に三十年、春去秋來幾十回、植ふるものあり、水澆ぐものあり、蒔くものあり、刈るものあり、困阨の時あり、欣喜の時あり、其の相混交する恰も織れるが如し、此等妙啓の事實を歴史と云ふ乎、然り而して此の歴史を創作せるものは神也、基督也、  
今や過去三十年の歴史編纂成る、一度之れを翻くもの必ずや神の攝理を感謝し、先人の榮を忍び、以て現在の立場を明にするなるべし、西部バプテストの搖籃時代は既に過ぎて第二期に入らんとす、然して此の期に吾人を邁進せしむるものは、此の一小歴史たるなり。

教兄青柳茂氏年來資料を蒐集せらる、紀念の事起るや、同氏に托するに編輯



の事を以てす、爾來、東奔西走、日夜思を焦し勞を致して此の冊子を完成せらる、洵に謝する多し、矣。

神願はくば聖靈は讀者諸士の上に働き給ひて、凡てを聖め、凡てを強め、以て神の榮光を現す器となし給はんことを希ふと爾云。

委員に代りて  
大正十一年十月上浣、  
瀨 加 守

文

はしがき

歴史は過去の記録であります。而して將來の指示であります。此の意味に於て、本書の編纂は私に取つて大なる興味となりました。私は、今回本書の編纂を托せらるゝや、曾て小野博士と共に集めた史材を引き出し、之を基礎として八方に書を飛ばして材料を集むるに力を盡しました。けれ共、案外に各教會又は各個人の記録は正確でありませんでした。されば編纂中に於て、甲の材料と乙の材料との間に矛盾のあるに氣付き、之れを吟味せねばなりません。或は御依頼した材料が集まらなかつた爲めに、夫れを待つ事に時日を徒費致しました。本年五月本書編纂の命を受けて、五箇月、漸やくにして一冊の書物となりまし



た。今假綴の書となつて机上に置かれました時、私は特に本書の爲めに神の祝福を祈らずには居られません。夫れを待て事二週日を経過し、始めの希望は、もつと大きなものでありました、けれども思ふ様には行きませんでした、之れも私の力の足らぬ爲めでありますから、皆様の御諒恕を願ひます。第一編第五章及び第六章の内にはウキリアムソンの執筆せられたのを譯出した處があります。其の他下瀬委員長を始め最初の傳道者後藤六雄氏其他幾多の諸兄弟の御援助を受けて居ることを茲に謹んで御禮申上ます。御本著の拙劣であること、史材の乏しいこと、配列の正鵠を失したること等、省みて懺

悔に堪ふぬ事であります。又た、御依頼した材料が集まらないのに發行の日が迫つて、或は個人の經歷や寫眞を割愛せねばならなかつた事を残念に存じます。三十年の歴史を事實に編まれ、其の生活を以て記されたる先輩に敬意を表し其を充分に筆に表はし得ざりし不文短才の自からを責むる者であります。校閲や、序文を願ひ度いと思ふた方もありますが、べ切が迫つて、約束せられた材料の集まらなかつた爲め、夫れも出来ませんでした、されば編輯に關する一切の責任を、私一人で負はねばなりません。筆執りしもの、責任を明らかにする爲め斯くは記しつ。

大正十一年十月十日

熊本にて 青 柳 茂

識す



大正十一年十月御断り

材料の蒐集、編纂、意匠、校正まで凡て一人で致しました爲めに、不備の点の少なくないことを残念に存じます。

印刷成りて机上に置かれたのを見ると、未だ校正の不充分であつたことを發見致します。

体裁・様式等に於ても、印刷所の都合で思ふ様に行かなかつた所もあります。

百十頁の寫眞は百四十八頁に入るべきものであります、其の他種字の誤は御判讀を願ひます。

特に本書は近代に疎に、溯るに従つて密ならんことを勉めました、若しいつか適當なる時がありますならば、一層詳しく、

一層正確なるものを作りたいと存じます。

日本バプテスト西部傳道畧史

目次

序文  
はしがき

第壹篇 バプテスト教會略史……………一

  第壹章 新約時代の教會……………二

  第貳章 教會の腐敗……………三

  第參章 荒野なる教會……………二〇

  第四章 アナバプテスト……………二四

  第五章 英國に於けるバプテスト教會……………三一

  第六章 北米合衆國に於けるバプテスト教會……………三五



第貳篇 日本西部に於けるバプテストの傳道	四二
第壹章 米國南部バプテスト大會の宣教師派遣	四二
第貳章 準備の時代	五二
第參章 九州傳道の着手	五七
第四章 九州の傳道 第一	六六
第五章 九州の傳道 第二	八七
第六章 西南部の傳道 第一	一〇九
第七章 西南部の傳道 第二	一三〇
第八章 西部バプテスト	一四六
現代に對するバプテストの使命	二〇一

日本バプテスト

西部傳道略史

日本バプテスト西部組合

編

第壹篇

バプテスト教會略史

今茲に日本バプテスト西部傳道略史を編纂せんとするに當り、先づバプテス

ト教會其物の歴史を記さねばならないのである、けれ共其は極めて久しき歴史を有するが故に、本書の到底よくする所ではない、只だ僅かに其の概略を記る



すに止めねばならぬことは讀者の諒恕を乞はねばならぬ第一である。

## 第 壹 章

### 新約時代の教會

第一、イエスの弟子、イエスはバレステナを從横無盡に傳道し給ふた、人々は彼に聞く事を好んだ、多くの人々は其の病患の醫やされんが爲めにイエスの許に來た、斯くてイエス三年間の傳道に於て、彼の教訓、彼の行動に敬意を表し、讚美を捧ぐるものは少くなかつた、或時は五千人、或時は四千人がイエスの足許に來て説教を聞いた、けれ共、彼の弟子となつたものは數百を出なかつたであらう。復生し給へるイエスを慕ひ奉りて、遂に謁わて拜せし人々の内にも、然れど疑ふものもあつたのである。イエスが復生し給ふて五百の兄弟に

現れ給ふたと哥前十五ノ六コリントゼンシヨに記してあるが、其の他にはさまで多數の弟子は居なかつたと思はれる。

復生の主イエスは、將に天に昇らんとし給ふや、「然れば汝ら往きて、もろくの國人を弟子となし、父と子と聖靈との名によりてバプテスマを施し、わが汝らに命せし凡ての事を守るべきを教へよ、視よ、我は世の終まで常に汝らと偕に在るなり」と命じ給ふた、之れは之れ弟子等に對する出陣の號令である

第二、教會の出生、弟子等は出陣の號令を受けたけれ共、其準備の爲めに待たねばならなかつた、「エルサレムを離れずして、我より聞きし父の約束を……待て」其は傳道の原動力とも稱すべき聖靈のバプテスマであつた、其の「聖靈なんぢらの上に臨む時、汝ら能力をうけん、而してエルサレム、ユダヤ全國



、サマリヤ、及び地の極にまで我が証人とならん」主イエスの昇天後、弟子等  
は一所に集り心を一つにして只管に祈りつゝ、聖靈の降臨を待った。

イエスが昇天し給ふてより十日、ユダヤの五旬節の日に當つて聖靈の降臨に  
際會した、今まで卵子の中に藏された生命は、雛となつて現はれた、此日弟子  
に加はりたる者、おほよそ三千人であつた。

彼等はバプテスマを受けて、弟子等の團躰に加はり、主の残し給へる聖餐式  
を共にしたのであつた。彼等は育まれたる猶太教會の内に居る事が出來ず、遂  
に基督の教會が組織されたのである、故にペンテコステこそは教會の誕生日と  
なつた。

第三、新約の教會、イエスが最初より猶太教と異なる團躰を組織せんとし給

へりや否やに關しては異説ありて俄に判定する事は出來ないけれ共、「誰も新  
しき葡萄酒を、ふるき革囊に入るゝことは爲じ、もし然せば葡萄酒は囊をはり  
さき漏れ出でて囊も廢らん。新らしき葡萄酒は新しき革囊に入るべきなり、」  
で新らしき團體として基督教會の發生は自然の數と云はねばならない、然らば  
基督教會とは何であるか、「聖徒となるべき召を蒙り、キリスト・イエスに在  
りて潔められたる」者の團體である。而して之れに二つの重なる意味がある、  
一は不可見的教會にして、洋の東西を問はず、時の古今を論せず、基督を首と  
する總ての人々の一團である、他は可見的教會にして地方／＼に組織せらるゝ  
信徒の團體である、即ち或はエルサレムの教會、ガラテヤの教會、エペソの教  
會等と云ふが如きである、本書に記述するものは後者である事は更に記す必



要もあるまい。

教會の職分に關しては、基督者の生命を開拓し、充實し、禮典及び教規を支持し、福音を擴布する事等である。

此の教會に加はれるものは「なんじら悔改めて、おの／＼の罪の赦を得んためにイエス・キリストの名によりてバプテスマを受けよ……」とのペテロの言を聽納れし者はバプテスマを受けたのである。而して弟子に加はり、基督者の交際をなし、聖餐の式を守つたのである、茲に二つの禮典がある、バプテスマと聖餐式とが之れである。

バプテスマに先行せねばならぬものは悔改めである、救主イエス・キリストに對する信仰の表白である、バプテスマは人の罪を赦す力を有するものではない、過去の罪を悔改めて、イエス・キリストを信ずることによりて罪を赦された

りとの自覺を有するもので、受くべき外部的表號である。従つて信仰を表白する事の出來ない兒童にバプテスマを施すことは、聖書の鏡に照らして誤謬であると云はねばならない、新約時代の教會に於ては、如斯誤れる儀式を行ふて居なかつた。

新約時代の教會に於けるバプテスマは明らかに浸禮であつた、そして之れに二つの意味がある、一は埋葬であつて、已に悔改めて主エスの十字架に釘けたる古き我を葬るのである、他は復活である、主エスと共に甦り、潔められて奉仕の生活に入ることである、パウロは此の事實に付いて次の如く云ふて居る、曰く、「なんぢら知らぬか、凡そキリスト・イエスに合ふバプテスマを受けた



る我らは、その死に合ふバプテスマを受けしを。我らはバプテスマによりて彼  
どもに葬られ、その死に合せられたり。これキリスト父の榮光によりて死人  
の中より甦へらせられ給ひしごとく、我らも新らしき生命に歩まん爲なり……  
」(羅六ノ四)と。

バプテスマを受けて主の教會に加へられたるものは、主の殘し給へる聖餐の  
儀式に與る事が出来る。聖餐式は、「其の信仰を告白してバプテスマを受け、  
キリストの教會の會員として其義務を盡しつゝあるものゝ受くべき禮典である  
、」(ムリンス博士 Baptist Beliefs) 最初の教會に於て、「斯てペテロの言を聽  
納れし者はバプテスマを受く。この日弟子に加はりたる者おほよそ三千人なり。  
彼らは使徒たちの教を受け、交際をなし、パンを劈き祈禱をなすことを只管つ

とむ」と徒二ノ四十一、四十二に記してある。

新約の教會に於ては、バプテスマを授けて聖餐式に與らせざりし實例なし、  
然るにビード バプテスト (父母或は擔保人の代理誓約に由て赤兒にバプテス  
マを授く) 教派にありては、一般に幼稚の時バプテスマを受けたる者も、自身  
信仰を告白するに至るまで、聖餐式に與らしめずと云ふ、之れバプテスマに關  
する誤謬が、如斯矛盾の原因となりしものである。

教會は其の職分を實行する爲めに、必要なる役員を選定せねばならないこと  
なつた、即ち監督或は長老と執事とが選ばれた、

監督と云ひ長老と云ふは同様な職分であつて、其の職分の爲めに聖靈の召命  
を受け、特別なる儀式禮典を執行する爲めに按手禮によりて聖別せられたる牧



者である、精神的指導者である。執事とは教會の世俗的方面に盡力する役員である。

第四、地方的教會、斯くてエルサレムの教會は組織せられた、然るに基督者に對する官民の迫害は益々甚だしく、執事ステパノの如き、信仰の故を以て遂に石にて撃ち殺された。基督教の歴史は由來迫害の歴史である、迫害によりて散らされたる者は、各所に傳道を開始した、四方に神の聖言葉は傳へられ、隨所に信仰の徒は起され、使徒等は彼等を訪問して其の信仰を堅め、基督教の傳播實に著しかつた。迫害の巨頭サウロさへダマスコ門外天來の光に打たれて悔改め、召されて福音の使者となり、小亞細亞より歐羅巴の各地に傳道し、多くの教會を設立した。

異邦教會設立の濫觴はスリヤのアンテオケであつた夫れよりビシデヤのアンテオケ、イコニオム、ルステラ、デルベ、進んではピリピ、コリント等數多の教會は設立せられた、而して使徒時代の終末とも云ふべきヨハネ永眠の頃（紀元百年頃）には羅馬帝國內に於ける基督者の數殆んど十萬人を下らなかつたと云ふ事である。

此等の教會は政治上全然獨立のものであつて、新約聖書中他の教會の行爲に干涉を企てたり、或は自己の優秀を用ゐて他教會を抑制せんとするが如き事は其の一例をも發見するとは出来ない。然れども、相互に孤立して、他を顧みないこと云ふのではない、クラウデオの時に起つた飢饉の時にアンテオケの教會は慰問の金品を集めてバルナバ及びサウロの手に托してエルサレムに送つた、



彼等は相互に慰藉し、提携して其の首なるキリストの榮光の爲めに盡し働らいたのである。

其　　パプテストが一般に信する所に關しては、ムリンス博士著「パプテストの信仰」を見られよ、小野博士の譯書もあり

## 第 貳 章

### 教會の腐敗

斯くも偉大なる事實によりて發生したる基督教會も、僅かにして腐敗の道に進み行かざるを得ない様になつた。其の原因及事情に關し詳細に記るす事は、今日の教會をして同様なる道に進ましめない爲めに有益なるものであると信ずるけれ共、頁數に制限のある小冊子の良くする處ではない。されば不本意ながら極めて簡短に之を記す事と致さう。

腐敗は生命の消亡より生ずるものである、基督教の腐敗も、其の生命を失へるより生じた。勿論基督御在世の當時に於ても、已に其の萌芽は見えて居る、即ち使徒等が來るべき神の國を以て權勢の國と認め、其の王國の建設せられたる曉に於ては左右に待するの權を我儕兄弟に與へられたいと願ふたのである、主エスは此の世の王と神の國の王との差異を懇切に教へ給ふたけれ共、果して彼等には理解が出來たのであらうか。又た主エスは古き形骸の中に新らしき生命を綴ぢ込めんとするを誠め給ふたのである、人體より生命を取去るならば、直ちに腐敗する様に、基督教も其の生命を捨てるならば、腐敗する事は免れられない。



## 第一 権力の集中

基督教の歴史は迫害の歴史である、此の迫害に對抗すべく、内部の結束を緊くせねばならなかつた、由來デモクラティックな基督の教會が階級的権力の爲めに司配せられ、権力者は所謂異邦人の君の如く、教會や牧師や信徒を司配し、救済の權我にありと自稱するに至つた、そして基督の仁愛と聖明とを蔽ふて信徒の爲めに叢雲となり、基督の教會を暗黒の淵に陥れたのである。基督の精神より離れた教會は腐敗せずには居られなかつた。

## 第二 思想の統一

制度及び組織の統一をなさんが爲めに、思想、信仰の統一をも計らなければならぬ、其の美名の許に思想、信仰を壓迫し、形式を重じ形骸を尊ぶの結果

、其の精神を輕んじ、生命を失ひ、内面的腐敗を來さざるを得ざるに至つた。茲に使徒信經（基督の昇天後直ちに使徒によりて編まれたりと云ふ傳説は、何等信を置くに足らず、紀元百五十年頃より用ゐらるゝに至つたものと如くである、けれ共其の文章の如きも漸次補足を加へて出來たものらしく、紀元四百年頃に書かれたるルウフキナスの書中に始めて其の全文の載せられたのを發見し得ると云ふ事である。）十二使徒の教訓（之れ亦た紀元百四十年自至百六十五年の作であると云ふ）等によりて、バプテスマを受けんとするものと信仰の内容を統一したのである、即ちカタキユメネートの制度を生じた、異教になづみたりし新悔改者の信仰を指導する事は、必要なるものであつた、けれ共、必要の程度を過ぐるならば、其は却て信仰の生命を奪ふ毒藥となるものである。



### 第三 救に關する迷信

一、僧侶崇拜、教權の制度は僧侶崇拜の弊風を生んだ、僧侶の信仰、其の人格、其が召命の自覺、献身犠牲の精神が一般信徒の認むる處となり、尊敬思慕を受くるに至るは、實に美はしき事である。けれ共、僧侶崇拜の原因は教權にあつた、基督と信徒との間に介在して信徒の自由靈交を阻止するより生じたものである、一般信徒は聖書を読むの自由を奪れた、祈禱の自由を奪れた、僧侶に懺悔し、僧侶を通して祈禱を捧げねばならぬ、斯くも暗雲に包まれた當時信徒の信仰は、聖靈の證明に非ずして僧侶の證明によりて救を得るものと誤認するに至つた。

二、形式に由る救、當時に於て難行苦行を尊重する慣習が盛んなるに至つた、博愛、慈善、貞潔、獨身、隱遁、斷食等が重せられて、以て救の條件と信せらるゝに至つた。

又たバプテスマの形式を重じて、之を新生の主要なる條件となすに至つた、十二使徒の教訓に曰く「汝等は斯くバプテスマを施すべし、即ち初めに凡て是等のことを表白し而して後父と子と聖氣との名に於て人を流水に沈めよ、流水なき場合には他の水に沈めよ、冷水に沈むること能はざる場合には温水に沈めよ二者共になき時は父と子と聖氣との名に於て頭上に三度水を注げよ、又バプテスマを施する前に當りて施沈者及び受沈者をして斷食せしめよ、若し能ふべくんば教會員も亦斷食するを宣しとす、而して特に受沈者はバプテスマを受くるの前二三日間斷食すべきなり」云々(ハリントン氏譯)バプテスマ教會史略の譯文による)。之れによ



りて見るに、初代の基督者は、バプテスマを甚だしく重んじ、肝要なる一儀式として守つた事を認むる事が出来る、けれ共、此茲に看過する事の出来ないのは、充分なる水がない場合は、バプテスマの眞似事でも之を行はねばならないと云ふことである、「人は水と靈とによりて生れずば、神の國に入ることは能はず」とのニコデモに對する主エスの聖語を其の儘に信じ主の眞意を汲むことをせずして、水のバプテスマを以て救に關するものと認めたのである。従つて無理にもバプテスマを施さねばならぬ、受けねばならぬとの迷信に陥り、所謂洗禮なるものを生ずるに至つたのである、蓋し、水に不足を感じる場合、或は病の爲めに眞のバプテスマの儀式を受け得ざる場合に之れを行ふに至りしものである、決して、形式であるから何でもよい、と云ふ様な誤れる思想でなかつたのである。けれ共、形式を過重するの結果、バプテスマの眞意を失ふて、救の重要な條件として其の形式を尊重するに至つたのである。

之に次ぎて起る迷信は、小兒のバプテスマである、即ちバプテスマが救の重要な條件であるとする誤れる前提は、人々をしてもしも小兒にしてバプテスマを受けずして死去する場合は、遂に救はるゝ事を得ずとの誤れる結論に到達せしめた、而してバプテスマを受くるに條件となるべき信仰の告白を廢して、責に任すべき引受人を立てた、自己の信仰に非ず、他人の信仰によりてバプテスマを受くる不合理なる結果も、儀式によりて救はるゝとの迷信より生じたる事實のみ。

斯くて自由なるべく、主エスにのみ事へ奉るべき教會は不合理なる教權の爲



めに壓迫拘束を加へられ、形骸が徒に尊重せられて、其の生命を失ふに至り、久しく教會は腐敗の中に陥つて了つた。

## 第 三 章

### 荒野なる教會

#### 第一 使徒的信仰の傳統

教會は既に其の本質を失ひ、基督より離れ生命を失ふた、けれ共、其は或る一部の教會にして、若し夫れ純真なるものを求めんと欲せば、寧ろ荒野に探ぬるに如くはない。今日でも其様である、國家的に又た社會的に認められて居る宗教團體よりも、人に知られぬ團體に於て、より多く宗教的なる事を發見する事が出来る、人に於ても然りて、隠れたる處に眞の宗教的生命ある人格を發見する事が尠くない。

ヨハネ黙示録第十二章を見るならば、「日を著たる女ありて其の足の下に月あり、其の頭に十二の星の冠冕」あるものに付て記されて居る。聖書註解者の殆んど總ては、女を教會であると云ふて居る、彼女は迫害を避けんが爲めに、女は荒野なる己が處に飛ぶために、大なる鷲の兩の翼を與へられ、其れに乗つて一年、二年、また半年、即ち千二百六十日の間かれが養はれ守らるゝ爲めに神の備へ給へる荒野へと行つたのである。彼女は「神の誠命を守り、イエスの證を有てる者」の祖となつたのである。されば當時教會として残れるのは、墮落腐敗の教會のみであつた。彼は遂に東西に別れ、希臘教會となり、羅馬教會



となつた。唯だ神の誠命を守り、イエスの證を有し、使徒の信仰を傳ふるものは、實に荒野なる教會であつたのである。

カソリック教會が、此の世の歴史の表面に在りて、教會歴史を獨占して居た間にも、荒野の教會は幾多の變遷を見た、其の消息は傳わらるゝ處極めて斷片的であつて、一聯の史に綴る事は困難なる事業である、又た詳細に記述する事は到底紙數の許す處ではない、されば之等を凡て省略せねばならない。けれ共淡きながらも眞理の光明を持し、脈々信仰の生命を傳ふるものは荒野なる教會であつた事を記憶せねばならない。

### 第二 ペテロブルシアン派

彼等の憧れは原始的信仰であつた、聖書の教ゆる眞理であつた。荒野なる教會を流さんとして、その口より水を川の如くに吐いた蛇(黙十二〇十五)は、幾多の讒誣迫害を試みた、即ちペテロブルシアン派に對するクルニー寺院の長老ペテロがなせし非難の一節に曰く、「此異端者等は古人の遺せし口碑傳説にも又教會の權威にも従はずして事々物々聖典の證明に之れ據れり」と、又曰く「彼等異端者は信者のみより成立てる精神的團體の教會を維持し而してバプテスマはキリストを信仰する者のみに施すべきものなりと主張せり(バプテスト教會史略八十、八十一頁)と云ふて居る。

### 第三 ワルデンス教徒

又たペテロ、ワルドの如き、聖書の教訓を重んじ、以て信仰行爲の標準となし、主エスを證して盛んに傳道し、其徒多く各所に傳道した爲めに、佛國西南



部地方は到る所に按手禮を受けない多數の熱心なる福音宣傳者があつたと云ふことである。彼等はワルデンス教徒として知られて居たが、一千一百八十三年ヴェロナの會議に於て異端者として有罪の宣告を受けたのである。彼等が主張する主要なる点は、聖書が信仰行爲の標準たる事を信じ、小兒のバプテスマに反對した、其の他幾多の人々が折に觸れ、時に應じて誤れるカソリックの桎梏より脱して、純眞の信仰に歸らんと企てたのである。

荒野なる教會は讒誣迫害の中にありて、脈々たる信仰の流を辿りつゝ、教會の眞生命を傳ふるの使命に仕へたのである。

#### 第四章

#### アナバプテテスト

##### 第一 アナバプテテストとは何ぞ

アナバプテテストとは再バプテスマ派と譯すべきである、即ち當時一般に行はれて居た小兒のバプテスマに反對し、バプテスマを受くるもの、條件として信仰を告白し得るものでなければならぬ、故に小兒に施したるバプテスマは無効であつて、假令斯くてバプテスマを受けても、成年に達し、自から信仰し得るに至つて再度バプテスマを受けねばならぬ、と主張するのであつて、アナバプテテストてふ名稱の起元である、けれ共、アナバプテテストの主張は之れに止まつて居るのではない、寧ろ其の主張の根元とも云ふべき、教會は全然新に生れたる者のみに依りて構成せらるべききものであるとの事が一層重んぜられた事である。尤もアナバプテテストの歴史は極めて複雑であるが故に、茲には其の概要



を略記するに止めたいと思ふ。

其の大体の精神は、初代の基督者の信仰、生活、行爲に倣はんとし、教會は信仰あり、更生したる人の團體でなくてはならぬと主張した、更生は各個人の事であつて、意識的の信仰を要すべきである、従つて或は兩親其他の係證人の信仰によりて受くる小兒のバプテスマには反對した。其の他教會と國家とを引き離して考へた。

アナバプテストの起元に關しては明白を缺く点が少なくはない、けれ共、荒野の教會が常に初代基督者の信仰生活行爲に範を求め、信仰的生命の泉を其處に置いたが爲めに、何時とはなしに胚胎し、出生したものと認められる。

## 第二 端西に於けるアナバプテスト

端西に於けるアナバプテストの歴史は悲惨である、即ち端西の宗教改革者ツキングリトは、聖書を以て信仰行爲の唯一の標準となし聖經の明白なる證明を有せざるものは之れを斥くるとの公言によりて、アナバプテストの主張と極めて接近したるものであつた、然るに幼兒のバプテスマに於て意見を異にし、爲めに一千五百二十五年一月、チウリツヒ市會に於て對論を試みしめられた、而して市會は勝手にツキングリーの勝を定めて、幼兒のバプテスマを命じた、斯くてツキングリーは、官憲の力を借りて革命の友アナバプテストを迫害した。之を始めとして、到る處に迫害が起り、奥太利領チロル地方に於ては、一年に死刑に處せられたるもの千人に上つたと云ふ、而も彼等の多數は無抵抗主義の極めて溫和なる信徒であつた爲めに、迫害を逃れて、安全の地を求むるのみ



敢て干戈に訴へる様なとはなかつた。只だ一の擾亂として傳へられて居るものはミウンスター事件である。

### 第三、獨逸に於けるアナバプテスト

ミウンスター事件とは、獨領ミウンスター市に起つた一の擾亂である。一千五百三十二年、ベルナルド、ロトマンと云ふ學識と辯才とに秀でたる少き説教者は、全市の人々を改宗せしめ、全市の同情を一身に集めた、そして、全市を占領した、羅馬軍の來り圍むに對して之れに應戦したけれ共、一千五百三十五年六月二十四日終に陥落した。

ロトマンがアナバプテストであつたと云ふ爲めに、此の教徒に對する迫害は甚だしく、非難攻撃の的となつた、恐ろしき迫害の極刑は彼等の上に加へられ

其當時の狀況を讀むものをして戰慄を禁せざらしむるものがある、然れども、

ロトマンが果してアナバプテストであつたらうか、當時のアナバプテストは却てミウンスターの擾亂を非難して居る處より察すれば、假令ロトマンがアナバプテストであつたとしても、決して其の徒の思想でもなく、代表的行爲でもない事は明白である、獨逸の研究者フツスリンは曰く「アナバプテスト教派の教徒と教徒との間に大なる相違ありたり、該教徒中奇異なる教説を抱持せしものもありしなるべし、然れども是を以て該教徒全体を評すること能はざるなり若し夫れ二三迷妄の徒が教へし愚妄の教説を一宗派全体の責に皈するに於ては世界中如何なる門派と雖も最も憎むべき誤謬を被らざるを免る能はざるなり」と、けれ共、獨逸に於ける當時の迫害は甚だしきものであつた。



#### 第四 和蘭に於けるアナバプテスト

獨逸に於けるアナバプテストはミウスター事件の爲めに一大打撃を蒙つたけれども、和蘭に於ては比較的幸運に導かれた、メンノ、シメオンスと云ふ人は一千四百九十二年フリースランドに生れ、羅馬カンリツクの教師として育てられた、然るにスナイジャルと云ふ仕立屋が、二度バプテストマを受け、而して其のバプテストマを頑守すると云ふ理由の下に、慘酷なる死刑に處せられた、スナイジャルは其の所有は勿論、生命をも喜んで犠牲に供した爲めに、其の血に感激して起つたものは尠なくなつた、メンノ、シメオンスも、僧職を辭してバプテストマを領しアナバプテストに加はつた、之れ實に一千五百三十九年であつた其の後彼はアナバプテストの指導者と樹てられ、メンノナイトとして千六百七十二年公許せらるゝに到つた。

### 第五章

#### 英國に於けるバプテスト教會

##### 第一、名稱

バプテストと云ふ名稱は、勿論反對者の付けた名稱であつた、紀元千六百四十四年バテキユラーバプテスト（特別神寵と特別贖罪とを信するバプテストの一派）の發せる最初の信仰告白に於て、アナバプテストと稱せらるゝを拒み單に「信じたるものにバプテストマを行ふ」と云ふた。又た一千六百五十四年の會合に於ける告白によれば「信仰告白によりてバプテストマを受けたる基督者」



と云ふた。けれ共、此等の名稱はあまりに煩はしいので、遂に今日普通一般に用ゆるバプテストなる名稱を用ゆるに至つたのである、即ちウヰリアム、ブリテン氏が「穩堅なるバプテスト」を發行したる、一千六百五十四年に、右團體の一員によりて公然用ゐられたものである。勿論此の時以前にも、バプテスト教會と稱し得べき教會が彼處此處にあつた、假令一千五百二十五年アウグスブルグにあつた一教會の如き、猶ほ又た瑞西や和蘭に於けるアナバプテストの内にも信仰を告白したものに浸禮を施して居た、けれ共、彼等には何等の連絡もなかつた爲めに、バプテストとしての歴史に加ふることは出来ない。

### 第二、バプテスト教會史の基礎

バプテスト教會歴史の基礎とも稱すべきものは、之れを第十七世紀の初め、

英國に於て見る事が出来る。英國に於けるバプテストは國教會に加はらなかつた爲めに分離派「セバレテスツ」と呼ばれ、數多の迫害を受けた、爲めに和蘭に移住するの止むなきに至り、アムステルダムに教會を興した、而して彼處に於て牧師ジョン・スミスよりバプテストマを受け、ロンドンに歸り、三十七人の同志と共に英國に於ける第一のバプテスト教會を組織する至つたのである。

### 第三、迫害の時代

バプテスト歴史の初代に在りては、自由の爲めに數多の苦闘は續けられ、幾多の反對と迫害との爲めに彼等はずぶさに辛酸を嘗めた。此の時代のバプテスト説教者の多數は、單に「福音を宣傳する」と云ふ理由の許に、牢獄に投せられた、彼の不汚の大作「天路歷程」を著したジョン・バンヤンの如き、彼が屬



したるベツドフォード、バプテストと共に、宗教劃一令の爲めに捕はられて、入牢十二年に至つた、彼は何處までも眞理に忠實にして、又た、福音の宣傳に熱心であつた。如斯迫害の激甚なる内に在つて、同信の人々は益々加へられた

#### 第四、外國傳道會社の組織

英國バプテストの歴史に於て一の重要なる日は、一千七百九十二年十月二日である、此の日英國バプテスト外國傳道會社は組織せられた。此れより先き、ノーサンプトン洲バプテスト組合は一千七百八十四年、外國傳道事業の爲めに毎月一回聯合祈禱會を開らく事を議決した、それから八年の後、ウキリアム、ケレーはイザヤ五十四の二、三節を引照して「なんぢが幕屋のうちを廣くし、……」の説教をなした、「神より大結果を求めよ、神の爲めに大事業を企てよ」と

此の説教に勵まされて、最初の傳道會社は組織せられた、其の會員僅に十二名彼等は貧しき内より百餘圓を献げて、以て外國傳道の初穂とはなした。聖書は曰く「誰か小さき事の日を藐視する者ぞ」と、世界教化の大も亦た、此の小事より初められたのである。

比較的に富めるロンドンの教會は、此の運動に冷膽であつた、而して比較的貧しき地方教會が協力して、翌年ケレーを最初の宣教師として印度に派遣した此の光榮ある歴史と共に、英國のバプテストは益々發達し行きつゝある。

## 第六章

### 北米合衆國に於けるバプテスト教會

#### 第一、三大時期



アメリカに於けるバプテストの歴史は之を三大時期に劃する事が出来る、第一期は普通歴史の殖民時代と殆んど同様にして、一方に於ては眞理の爲めの忠實なる證明を特長とし、他方に於ては甚だしき迫害に苦るしまされたのである。第二期は普通歴史の地域擴大の時代にして、バプテストの發展時代と呼ぶと出来る。第三期はメキシコ戦争より今日に至るものにして、傳道及教育の時代と稱すべきものである。

## 第二、第一期

英國に於ける迫害を避けて新英州に移住したる清教徒の内に、少數ながらバプテスト教徒も混じて居た、けれ共、アメリカに於けるバプテストの最初はロージャー、ウヰリアムスを推さねばならない、彼はウエールスの名家に生れ、

牛津に於て教育を受けたが、英國々教會に反對し、一千六百三十一年米國に航し、ロードアイランドにプロウデンズ市を建て、バプテスト教會を起したと傳へられる其の他、心靈的自由を求めて、新英州に移住したバプテストは少數でない、けれ共、此處にも幾多の束縛があつた、「清教徒が此の國に來たのは、自から本心の指導に従て神を崇拜し、而して他人が其の本心の指導に従て神を崇拜するを妨碍せんが爲めであつた」と云ふも、奇警の言に似て、實は眞であつた。けれ共、迫害は眞理を如何ともするとは出来ない、バプテストの教勢は益々充實し、發展した。現に北米合衆國に於ては、信徒數各教派に冠絶し、異常の發展をなした。



アメリカに外國傳道會社の起されたのは、實に第二期であつた、之れ、アドナイラム、ジャドソンに指導せられたものである彼はマサチューセツツ洲の會衆教會派の牧師の息であつて、ブラオン大學及びアンドバー神學校に學んだ。當時ジャドソン及びアンドバーの學生等の主唱によりて、會衆派に外國傳道會社が組織されて、一千八百十二年と云ふに、數名の宣教師は印度へと送られた其の内にはアドナイラム、ジャドソン及び同夫人、アン、ハツセルチン、ジャドソンの居た事は勿論である、然るに彼は船中に於てバプテスマに關する疑問を生じ、研究に研究を重ね、特に熱心に聖書の研究をなし、遂に自己が受けたるものゝ誤れるを認めて、心中大なる苦悶を重ね、幼兒のバプテスマも洗禮によるバプテスマも眞のバプテスマと云ふべからず、然ば余等は未だバプテスマを受けて居ないと同様ではなからうか、と自問し、又た自答した。遂に彼等夫妻は一千八百十三年九月六日カルカッタに於て宣教師ウキリアム、ワードによりてバプテスマを領した。彼の同勞者ルーサー、ライスも亦た同様の經驗を味ひ、十一月一日浸禮<sup>バプテスマ</sup>を領し、後者は報告並に交渉の爲めにアメリカへ歸つた、翌年五月此の場合の必要に迫られ、合衆國バプテスト外國傳道會社を組織し、一千八百四十五年に至つた、此の年南部バプテストに内外國傳道會社なるものが組織せらるゝに至つたのである。

#### 第四 特長の一、二、

又たアメリカバプテストの特長の一として數ね得べき事は教育事業の異常なる發達にして、殆んど最初より子弟の教育に留意し、進んで高等學校、専門學



校、大學校を設立した。特にバプテストの主義として信仰行爲の標準を聖書其物に置くが故に、聖書の翻譯に力を盡した事は、一般に認めらる處である、即ち、ウキリアム、ケレーの譯したるベンガル語聖書及印度に於ける二十四の異なる方言に譯されたるが如き、支那語の最初の譯はジョシユア、マーシマンによりて成され、ビルマ語の唯一の譯書はアドナイラム、ジャドソンによりて成された、シヤム語の第一の譯はジョン、テーロル、ジョーンズに因り、アツサム語と、日本語最初のものとはネサン、ブラウンにより、テルグ語に完全に譯されたるはライマン、ジュエツトによるものである、其他にも數種を算ねる事が出来るけれ共、バプテスト宣教師の功勞尠からざるを思はしむるものである。

今や世界の基督教會に於ける、バプテストの現況は異常なる力の發現にして、至る處に其の實力を發揮しつつあることは、吾人の光榮とする處である。





## 第貳篇

日本西部に於ける  
バプテストの傳道

### 第壹章

米國南部バプテスト大會の  
日本宣教師派遣

第一、不幸なりしエドビンフォレスト

時は西曆一千八百六十年（万延元年）であつた、北米合衆國ジョージヤ洲アウクスタに於て南部バプテスト大會（Southern Baptist Convention 今後之れをSBCと記す）が組織せられてより十五年の後、同外國傳道會社はJCAローラー

CHトリー、及びジョンLデジョンソンの三青年を指定して、日本傳道の端緒を開らんとした。

彼等は非凡の才能と確固たる信仰の人々であつたから、其の將來には大なる希望を囑せられ、其が新傳道地到着の上は開拓教化に偉切を奏すべきことを疑ふものはなかつた。然り、もしも彼等が當時に於て我日本に傳道を開始したらんには、恐らくは我國新教傳道史の第一頁に一層の光輝を添へた事であつたであらう。

ローラー夫妻は一千八百六十年八月三日ニューヨークを後にして、希望に輝く厚き又た堅き信念に満されて、新傳道地—日本國—に向ふて出發した、其の乗船は不幸なるエドヴキン、フォレスト號であつた、惜しむべし、燃ゆる血と



非凡の才能と、偉大なる希望とは乗船と共に何れにか其の姿を失ひ、遂に其の消息を傳へずなつてしまつた。而して翌一千八百六十一年四月に序幕の切り落されたる南北戦争の爲めに拒まれて、他の二青年トイー、ジョンソンの兩氏も、遂に其の任命に従ふ事が出来なかつたのは、残念至極な事であつた。

此の、新興日本帝國の靈的開拓者たらしめんとて、三人の有爲なる青年を指定した計畫は、行はる事を得なくなつた、けれ共、其の希望が失なはれたのではなかつた。

第二 當時に於ける日本の状態

翻て我國當時の社會を見るならば、合衆國の使節ペルリによりて、長夜の睡眠は醒まされたとは云へ、未だ歐米の事情に暗らく、天下の大勞に通ずる事も



きりしたん宗門は累年御制禁たり自然不審成ものこれあらは申出べし御ほうびさして

定

ばてれんの訴人 銀五百枚  
 いるまんの訴人 銀三百枚  
 立かへり者の訴人 同 斷  
 同宿並宗門の訴人 銀百枚

右之通下さるべし、たさひ同宿宗門の内たりさいふさも申出る品により銀五百枚下さるべし隠し置他所よりあらはるゝにおゐては其所の名主五人組迄一類ともに可被行罪科者也

正徳元年五月 日

右被仰出之趣意可相守者也

奉行

大助

右制札は茨城縣稻敷郡君賀村に掲示されたもので、水戸バグテスト教會牧師吉田繁氏の所有にかゝるもの、原品は板の大きき横二尺五分、高さ一尺一寸、厚さ一寸一分、現存中の最古のものといふ。



得せず、基督教は依然として禁制であつた。津々浦々には「一切支丹邪宗門の儀は堅く御禁制たり、若し不審なる者有之ば其の筋の役所へ申出べし、御ほうび下さるべく事この太政官の制札が掲げられて居た、故に基督教の傳道は之を公然なす事は出来なかつた、けれ共、既に通商條約は締結せられ、神奈川、長崎、函館の三港は開られ、新潟、大阪、兵庫は互市場となつた事であつたから、基督教各派は競ふて此の極東新興國の開拓傳道に従ふた。

一千八百五十九年（安政六年）五月二日、長崎に上陸したる米國監督教會宣教師リッギンス氏を先登として、同派の宣教師CMウキリアムス、米國長老教會宣教師JCヘボン、米國ダッチ、レフォームド教會宣教師SRブラウン、CFヴルベッキ、DBシムモンスの六氏は月日に前後こそあれ同じ年に渡來して日本教化の事に従うたのである。

### 第三、日本に於けるバプテスト傳道

我がバプテスト教會最初の宣教師はJゴープル氏である、氏は最初米國の使節ペルリ提督が日本を訪れた時、其の軍艦の乗員として渡來した、時は一千八百五十四年（安政元年）である、彼は其の軍艦の碇泊中、浦賀に上陸して、千太郎なるものを知るに至り、伴ふて歸國し、之に教育を授け、遂にバプテストを施したと云ふ。されど氏がユルゲート大學に勉強し宣教師としてバプテスト自由傳道會社（Baptist Free Missionary Society）より派遣せられたのは、前記六氏が來朝した翌年、即ち一千八百六十年（万延元年）四月であつた、此の時千太郎なるものを伴ふて來り、共に傳道に従事したけれ共、彼等は無學にして



ゴープル氏の如きも極めて短慮なる人であつた爲めに傳道上の効果として記  
るす程の事はなかつた。けれ共氏は横濱に在りて英語を教授し、又靴の製造  
を教へられた、加之、夫人が足の不自由なりし爲め、車を造りて人に曳かしめ  
以て人力車の發明をなしたるが如き、我國近代文明に貢献せられた、事は其の  
功に對して多とすべきである。氏は十二年間傳道をして歸國された。され共、  
事實に於て我がバプテストが日本教化の事業を興したのは一千八百七十三年（  
明治六年）アメリカ、バプテスト宣教師同盟（American Baptist Missionaries  
Union 今後之をA B M Uと稱す）が傳道を開始するに至りて、ネサン、ブラオ  
ン氏が渡來した時と見るべきであらう。

時は切支丹宗禁制の制札が撤去せられた年である、然り制札は除去せられた  
けれ共、實は表面のみであつて、内は矢張り壓迫が強く強く加へられて居た。

其の間に在りて、一千八百七十四年（明治七年）に、キダ女史は東京市神田區  
駿河臺に駿臺英和女學校を建設した、其頃より陸續として宣教師は送られ、C  
日カーペンター氏は北海道にアイヌ傳道を開始する等、大いに神國擴張の事に  
従ふたのである。ブラオン氏が渡來した時は、六十六才の高齡であつた、然も  
日本語を勉強して、新約聖書の翻譯に従事し、遂に之れを完成した。又たキダ  
女史は我國に於ける女學校の最初の建設者であり、カーペンター氏はアイヌ傳  
道の開拓者であつた。

第四、南部バプテスト大會の送りし最初の宣教師  
エドヴァキン、フォレスト號の哀しむべき事件がありてより三十年の後、西曆



一千八百八十九年（明治二十二年）五月、南部バプテスト神學校を卒業せるJ  
Wマコーラム、J Aブランソンの兩名は、日本傳道の使命を負ふて立つた。此  
年のS B C年會に於てJ B テーロー氏がなしたる報告の一節に曰く、「新らし  
き傳道地は開られた、單に從來傳道しつゝありし國の内にあらず、夫れ以外  
の地、即ち有名なる日本である、三十年以前、我傳道會社は彼の大帝國に傳道  
を開始すべく決議した、其の時には遂に道が開られなかつたけれ共、其の計  
畫は捨てなかつた、支那のイエーテス博士は傳道事業の爲めに最も有望なる傳  
道地の一として日本を注意して居た、我大會は昨年に於て、此の久しく等閑に  
付せられたる而も進歩的なる帝國に傳道を開始すべき事を傳道會社に推薦した  
我が、傳道會社は異常の適材たる二青年を『此の最も有望なる企圖の開拓者』  
として、選定した」と。

神の叫び給へる進軍の號令に従ひ、其の全能の聖手に托されて、此の二人の  
異常なる適材は、一千八百八十九年十月十七日、新婚の妻を伴ふてサンフラン  
シスコを出發し、エドヅキン、フォレスト號の追憶を新らしくしつゝ、我が日  
本帝國へと向ふた。當時此の二人の青年が、其の多望なる生涯と豊富なる才能  
とを、知らるゝ事尠なき大平洋の彼岸なる一小島帝國、新興の日本に葬り去る  
事の、あたら措しきを非難する人々も少なくはなかつた。深く又た強き傳道心  
に覆はれて居た神學校の學生さへ、其の才能を外國に徒費せんとする人々とし  
て、此の二人を惜まずには居られなかつた。あはれ彼等多數の人々には「わが  
召して行はんとする業の爲にバルナバとサウロとを選び別て」（徒十三〇）とのア



ンテオケの教會に與へられたる聖靈の教訓を理解する事は困難なる業であつたのであらうか。

賞讃も非難も彼等の心に任せて、神の聖き御指導に頼りつゝ、マコーラム、ブランソンの兩夫妻は、新らしき使命に向ふて大平洋を航し、十一月五日無事横濱に上陸した。

## 第 貳 章

### 準備の時代

マコーラム、ブランソン兩氏等が横濱に上陸するや、既に傳道を開始し居たるABMUの宣教師から大いに歓迎せられ、相談の結果兩氏等は一時神戸に居を定むる事に決した、されば彼等は暫時阪神の地方に在りて語學風俗習慣及び傳道事業の實際を學んだ。

此の準備の時代に於てマコーラム氏は主として口語の習得に務め、ブランソン氏は主として字劃の研究に其の注意を集注した、マコーラム氏は大阪の繁華の町に居を定めて、日毎に接する人々の唇より言語を學び、習慣を覺へた、其の熱心なることは言語に絶し、普通の宣教師が五年も要してさへ達し得ない所を僅々二年にして一層の上達をなした。如斯貴重なる援助者を與へられて、ブランソン氏は文章の語學の學得の爲めに基礎を置く事が出來た。斯くして彼等は永久の傳道地を選定すべき準備に一段落を告げたのである。

彼等がSBCの日本に於ける傳道地として九州を選ぶに至つたのは、彼等が横濱に上陸してより二年有餘を経たる、一千八百九十二年(明治二十五年)一



月の事であつた。

今より我がバプテストの九州傳道を記るすに當り、日本基督教史上に於ける當時の状態を一瞥する事と致さう。

日本に於ける基督教の歴史。仰も我國新教の傳道は之れを六大時期に分割する事が出来る、即ち準備の時代、定礎の時代、發展の時代、順潮の時代、逆潮の時代及び同化の時代である。而して、我バプテストが九州の傳道を開始したのは、丁度第五時代、即ち逆潮の時代であつたのである。

明治維新の大業成り、海外との交通漸やく盛なるに及びて、世界の氣勢に通づる國士相謀り、切支丹宗門の禁制札は撤去せられたけれ共、固陋なる人々は敢て禁制の徹廢を否認し、單に制札を撤去せるのみと強辯した程であつたから

陰に陽に基督教は迫害せられた、けれ共、如斯時代に於て宣教の準備は進められ、基礎は据へられたのである。然り而して、歐米の文化が追々と紹介せらるゝに及びて、自由民權、或は立憲的思想が志士の間唱道せらるゝ様になつた、當時猶ほ未だ勢力微弱であつた基督教徒も、經驗派、功利派、懷疑派、不可識論、進化説等と闘ふて、正論を主張し、内にありては信仰の復活を見、又た基督教主義の學校を設立する等大いに發展を見るに至つた、而して歐化主義が我國上下を風靡するに及びて、基督教は、所謂順潮の時代となり、各派は其の基礎を定め、且つ羽翼を延ばし、教勢傾に舉り、明治十九年に於ては教會百九十三、信徒數一萬三千人であつたのが、明治二十三年には教會三百、信徒數三萬四千人を算するに至つた、之を見るに、此の間に於いてバプテストマを領し



たものは一箇年平均五千人以上に上つて居る。(我國基督教史の時期に關しては、高木壬太郎氏の基督教大辭典に由る)

一上あれば一下あり、一も二もなく歐米のものとし云へば直ちに歡迎讚美を惜しまなかつた所謂歐化主義の反動は、國粹保存主義となつて現れた、極端より極端に行くが人文史の描く波動の常とは云へ、之れは又た、一も二もなく、外國の息味あるもとし云へば、之を排責する時代は來た。基督教が東洋の一角より起つて、東洋の他の一隅なる我が日本に渡來する爲めに、印度洋を通つたか、或は大西洋、大平洋を航したかと云ふ差異のみで、外面に付いた嗅と色とには差別もあらう、けれ共、其の本質に何等の區別もない基督教をさへ、歐化主義と同じ様に取扱つたのである。あはれ彼れ等には、宗教に國境なしと云ふ事實さへ理解する事が出來ないで、切に反對をしたのである。此は基督教傳道の爲めには、逆潮の時代だと云はねばならない。

此の時代に於て、我がバプテスト教會の九州傳道は開始されたのである。

## 第 參 章

### 九州傳道の着手

之れより先きA B M Uの傳道しつゝあつた赤間ヶ關浸禮教會の一會員鶴原五郎氏は、當時福岡縣遠賀郡若松に居住せられ、石灰を業とせられたが、業務の餘暇熱心に福音の宣傳に盡されたのである、然るに業務日一日と繁昌なるに従ひ、傳道の事が意の如く運べない所から、此處―若松―に一の講義所を設置せん事を、所屬赤間ヶ關浸禮教會に計つた、然るに教會も之れに賛成し、一千八



百九十年（明治二十三年）十一月三日、朝野共に祝する皇國の佳節に當り、若松に基督教講義所を設置した、之れ實に九州に我バプテスト教會の講義所を設置したる濫觴である。其の昔、初代基督教會の信徒が、國の内外に散り行いて福音を述べ傳へ、教會設立の基礎を据ゑた、光輝ある傳道の最初を省みた時、吾人は我が九州の傳道の爲めに、大なる感謝を捧げずには居られない。然り而して我がバプテストが九州に於ける最初の傳道者は青砥（今の後藤）六雄氏であつた。

青砥六雄氏は万延元年二月生、明治八年より十二年迄で小學校教育の事に従ひ、明治十二年九月より裁判所に勤務、裁判所書記、判事試補に歴任、明治二十年判事登用試験に合格す、明治二十二年一月、訴訟事件に従事せんが爲め、

本職を辭し、下關市に轉居した、之れ實に主の大なる御攝理であつた事を信せざるを得ないのである。氏は下關に來るや、青年信者森藤三郎氏の熱心なる勸



九州に於ける最初の傳道者  
青砥六雄氏

誘を受け、同地の浸禮教會に出入するの機會を得、當時の牧師吉川龜氏、及び後任牧師鈴木任氏の熱心なる指導を受けつゝ、進んで斯教の研究をなし、遂に明治二十二年十一月二十三日鈴木牧師によりて

硯海の清き潮流にバプテストマを領せられた。越えて翌年十月、赤間ヶ關浸禮教會及び當地在住の宣教師ホルセイ氏の招聘あるや、身体、生命、財産の人生三



大權の擁護者又た防禦者を以て任じた氏は、寧ろ、天父と罪惡とイエスの救との三大事實を宣傳し、彼の三大權を侵害しつゝあるものをして、無限の富、永遠の生命に導く事の光榮ある使命に従はんと決心を起し、遂に偉大なる感謝を以て、其の招聘に應せられたのである。斯くて十一月三日、若松に講義所の開設せらるゝと同時に、氏は其の主任傳道者となられたのである。

次に九州バプテスト教會の初穂とも云ふべき鶴原五郎氏の略歴を記るすと致さう。氏は安政六年五月五日、伊豫國浮穴郡西谷村に生れた。幼名は五郎太初め教育に志して小學校教員となつたが、僅々二年程にて辭職し明治十二年河内國茨田郡守口町にて書籍及紙類の商店を開業した、明治十四年、大阪の人五代友厚氏が北海道開拓使長官黒田清隆氏と結托して官有物拂下に付きて不正の

事あり、天下は其の非を鳴らして政府を攻撃した、當時、氏も漸やく國事に意を致した折であつた故に、守口町に大阪新報の社員加藤政之助氏を招いて政談演說會を開催した

之を最初として政治界に奔走する様になり、我が日本バプテスト派の元

故鶴原五郎氏



るに至つたのは、實に其の頃の事であつた。其の後、星霜移り移つて、十年を閲した、某月某日、氏は下關に於いて理髮

床にあつた時、鏡面に知人吉川龜氏の寫るのを見た、氏は入りて久濶を叙し、談は種々なる思出に初まりて、終に、吉川氏が基督教宣傳の爲め下關に來住し



居らるゝとを知るに至り、其後氏に就きて斯教を學び、明治二十三年九月七日宣教師ホルセイ氏によりてバプテスマを領せられた。斯くして若松の自宅を講義所となし、自から福音を宣傳したのである、之れ實に九州に於けるバプテスマの最初の傳道である。

青砥氏は明治二十三年晩秋、此の地に傳道を開始するや、翌年二月同縣下小倉町に講義所を設けて、毎週木曜日に出張傳道をせられて居た。同年十月、九州を擧げて南部バプテスマ傳道會社の管理に移るに當り、同縣下蘆屋及門司に講義所を設け、蘆屋には若松より青砥氏毎月二回、門司には小倉より來住甲子太郎氏タロウ毎週一回出張傳道を爲して居た。

當時小倉の親戚に宿泊して居た一人の青年が居た、青砥氏は毎週木曜日に小倉へ出張する毎に此の青年を訪れて聖書の話をした、或時、彼れは之れを嫌らうて不在を粧ふた事もある、けれ共青砥氏は熱心に不屈不撓の努力を以て彼を導いた、彼は遂に喜こんで教會に出席する様になつた、自から進んで斯教を學ぶ様になつた。而して明治二十五年一月十日、プランソン氏が九州に來ても無く同氏によりてバプテスマを領した、此の青年こそは、現に我がバプテスマ教會に於て熱心忠實なる牧師菅野半次氏であつたのである。

猶ほ一名の記憶すべき人物が青砥氏の働によりて導かれた、彼は鈴木茂太郎氏である、青砥氏が若松に傳道して居た時の事、或る傳道說教會に一人の見馴れない人が入つて來た、顔は蒼白にて鬚髮漆黒、最後迄で傾聽して居たが、說教後挨拶を交さんとした時は既に戶外に去つてしまつた、其の後、青砥氏は此の



人の事が氣に懸りて、種々其の人の居宅を探ねた處が、約一箇月の後に至りて漸やく某米屋に同居する由を知り、訪問をなし、信仰談を試みた、彼は大いに感ずる處があつて八箇月の後、受浸入會した、彼は鈴木茂太郎氏である鈴木氏は多藝多能の人にて、書畫を



鈴木茂太郎氏

能くした、其の性質極めて緻密、又た熱烈、其の信仰は恰も火を吐くが如くであつた、未だ教會に入會せざ

ら傳道に従事し、二十七年十月福岡に、門司浸禮教會の總會が開らるゝや、選まれて執事となつた、實に九州に於けるバプテスト教會最初の執事である。不幸にして氏は早く、神に召されて其の民に加へられたけれ共、緻密なりし氏の残した記録文書は、今回本書の編纂に當りて、大なる力と、豊なる材料とを我等に供給して居る、逝きし人を偲びて、感謝の誠意を表はし度く思ひ、斯くは記したのである。

上記の如く、若松、小倉に傳道の門戸が開られ様として居る所に、J A プラソン、J W マコーラムの兩氏は九州に來たのである、神は常に其の僕を遣はし給ふに當り、先づ適當なる準備をなし給ふ事は讚美すべき極みである。



## 第四章

### 九州の傳道 第一

九州に於ける基督教傳道の歴史は極めて古いものである、けれ共、舊教傳道の事は別に記さない、新教の傳道に於ては最初の宣教師六名の内、ダッチ、レオムド教會のGFウルベツキ氏は安政六年十一月に、米國監督教會のJリギンス、CMウ井リアムス兩氏も亦た同年に渡來して長崎を根據に基督教は宣傳せられた。メソヂスト教會も亦た明治六年八月、日本を四區に別ち、長崎にデビソン氏を送つて布教せしめた、故に各派は既に相當年月と、經驗とを有して居た、此の場合ルーテル教會とバプテスト教會とは相前後して、九州の地に福音を宣傳すべき御用に從ふ事となつたのである。

西曆一千八百九十二年（明治二十五年）一月、プランソン氏先づ九州に來り



九州バプテスト第一回親睦會  
中央はラソン氏

小倉に居を構へた。マコーラム氏は之れよりも少しく後れて、同年三月來り會し、共に共に福音の宣傳に従事した。當時氏等と共に働らいた邦人傳道者は青砥六雄氏、來任甲子太郎氏、北島龜次郎氏、婦人傳道者は守屋エイ、徳富ノブの兩氏あり、講義所を増設し、英語學會を設立し、路傍傳道をなす等、非常なる努力と熱心との結果、福音の種子は夥しく蒔かれたのである。然るに徳富、北島兩氏相前後して職を退き、同



年初秋にはブランソン氏も亦た歸米の止むなきに至つた、氏は其の以前より辭任して歸米した方が善からうと云ふ事を繰返し、繰返しては嘆息を洩した、而して其の友に云ふのには「マコーラム！余は如斯して居る事は出來ない、主は吾輩を此の地に要し給はない、余は圓い室の四角なピンである」と、遂に彼は辭職して其年の九月此の國を去つたのである。

其の後來住氏も瓢然として任地蘆屋を去つた。此の年十月、即ちブランソン氏が任地を出發してより二週間程を経て、ENウオーン氏夫妻は渡來した、而して小倉にマコーラム氏と共に居住して具に開拓傳道の辛酸を嘗めたのである九州バプテスト教會傳道の、開拓者として擧ぐべきは、青砥六雄氏、J W マコーラム氏、ENウオーン氏の三名を推すべきか。

明治二十五年十二月二十七日、菅野半次氏傳道者となり、蘆屋に定住せらるゝこととなつた。氏は明治二年十二月二日の誕生にして、前述の如く、青砥氏の熱心なる指導の許に改宗し、一年を経ざるに献身以て傳道者となる時に年二十四歳、氏は實に我バプテスト



九州バプテスト教會の初最トステプバ州九  
者身献の初最トステプバ州九  
氏次半野菅  
教會が九州に於て得たる最初の傳道者であつた而して其の忠實なる働きと熱心なる信仰とは克

く蘆屋人士の蒙を啓き、該地に神の榮を顯はすこと、蓋し尠少でなかつた。

一千八百九十三年（明治二十六年）十月四日マコーラム氏を假牧師として門



司バプテスマ教會を設立するに至つた、此の日午前十時、青砥氏を假議長として教會設立認可會議を開らいた、會するもの川勝鐵彌氏、(横濱浸禮教會)藤田虎雄氏、二宮義親氏(大阪浸禮教會)吉川龜氏(神戸浸禮教會)鈴木任氏、遠藤權二氏(長府浸禮教會)森田愛光氏、宮本武一氏(赤門關浸禮教會)の八名であつた。投票の結果吉川氏議長となりて會議を開らく、信徒總代鶴原五郎氏質問に答へた、斯くて門司バプテスマ教會の設立を可決し、午後二時より左の順序に従ふて教會設立式を舉行した。

司會者 吉川龜氏 祈 禱 二宮義親氏

讚美歌 第一番 會衆一同 教會の履歷 鈴木茂太郎氏

聖書朗讀 森田愛光氏 讚美歌 第二九番 會衆一同

説 教

川勝鐵彌氏

教會への勤め 鈴木任氏

親しみの握手 吉川龜氏

祝辭、祝文、

祈 禱 川勝鐵彌氏

讚美歌 第一八八番 會衆一同

祝 禱 ホルセイ氏

右終りて一同茶菓を喫し、午後四時三十分散會した、此の日會するもの男女五十五名であつた。斯くして九州最初のバプテスマ教會は組織せられたのである。

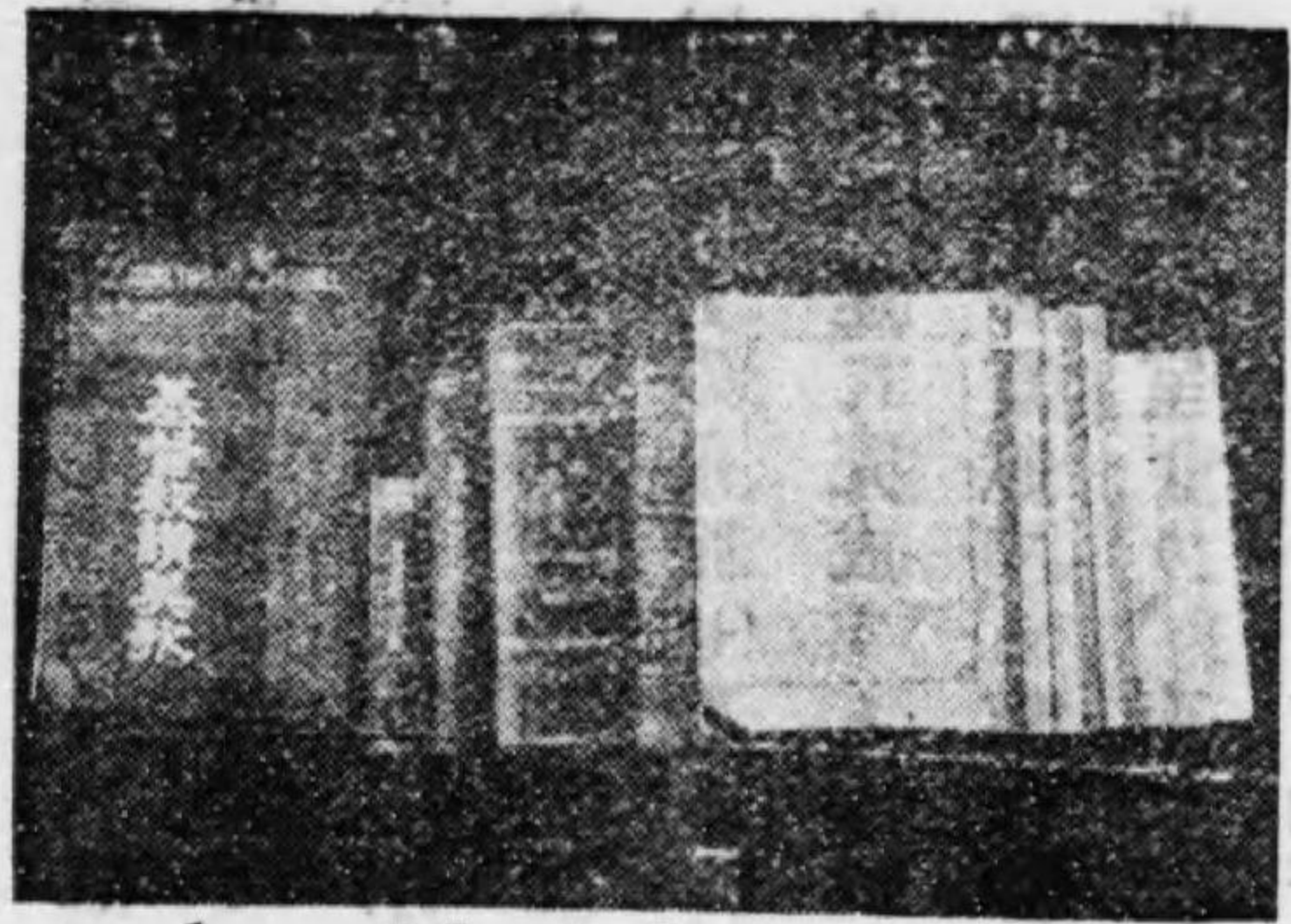


一千八百九十四年（明治二十七年）の春、川勝鐵彌氏は横濱浸禮教會の牧師を辭し、小倉に來任せられた、之れ實に新らしき宣教師を補佐して鎮西に神の王國を建設せんが爲めであつたのである。氏は嘉永三年十月廿六日肥前國東彼杵郡大村に生る、稍長するに及び文武兩道に赴いた、二十歳の頃、時は丁度王政維新に際して、氏は奥羽戰役に出陣し、上野の役に負傷した、平定の後、藩命によりて砲術修業の爲め上京し、更に洋學修業を命せられたが、明治四年一般の改革によりて、藩費の學生が廢止せらるゝに逢ひ、氏は時勢に感じて私費を投じ、特に續いて滯京、米國人ジョン、バラ氏に付き英語の研究をなし、同時に基督教が我國家に無くてならぬ大切な宗教である事を感じて、率先信仰し明治七年長老教會に於て本田庸一、井深梶之助、熊野雄七等の諸氏と共にバラ

氏より洗禮を領した。翌年バプテスト教會宣教師ネサン、ブラオン氏に就きて聖書を研究して居る内に、バプテストマの形式に付きて深く考へさせられたが、遂にバプテストマは浸禮でなければならぬことを覺るや、直ちに浸禮を領してバプテスト教會に入り、明治十二年十一月一日横濱に於て按手禮を受け、牧師となられた。其の後明治十九年までブラオン博士と共に聖書翻譯の事に従ふたが同年博士の永眠せらるゝや、ペンネット博士と共に其の事業を繼續し、明治二十一年遂に完成する事が出來た、其の勞や多とすべく、又た之れが我國基督教の爲めに貢獻する處は少なくなかつた。其の間より其の後に懸けて、氏は北は北海道根室より、南は流球に至るまで、迫害の間を馳驅傳道し大いに神の御用を務めたのである。如斯才能と經驗とを有する氏が九州傳道に來加したと云ふ

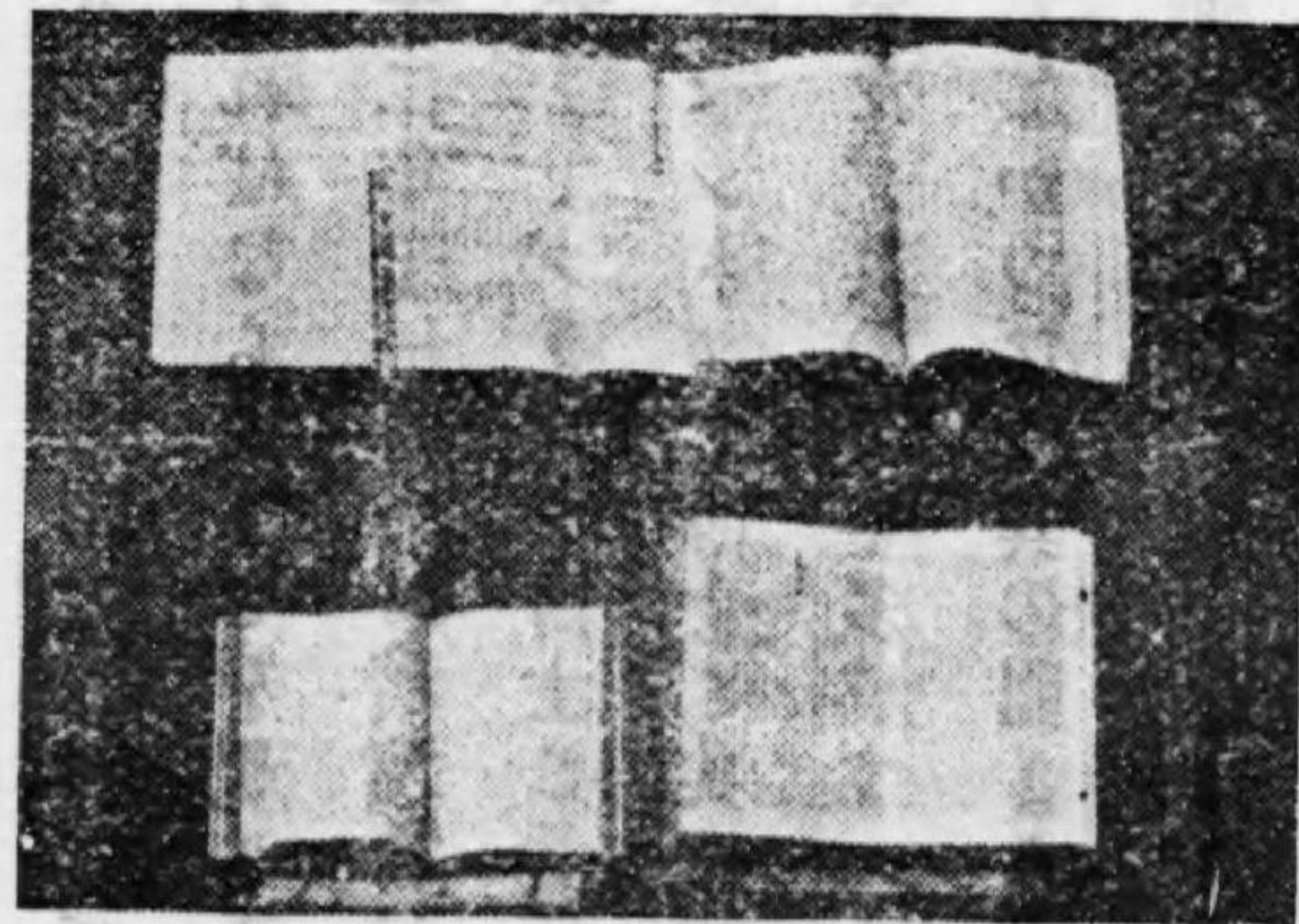


第一圖



1 2 3 4 5 6  
イ ロ ハ

第二圖



ニ ホ

第一圖 1は明治二十九年二月發行の物にて表紙圖案はペンネット博士の作なり、其の内部を示す、2は前者の無譜のもの、3は明治二十二年發行のものにして、活字體面白し、何れも「主我れを愛す」の處を示す（史前小讚美歌ありしも今は見當らず）

4は明治二十七年出版の假名新約にて第二圖は其内部を示す、5は明治三十三年發行にて現行の改正譯を比較して選色なしと云ふも可なり、6は各部分の本にして、普通の活字を用ゐしものなるも、最も注意を引くものを巻頭に置く第二圖ハ内部を示せるものにて假名を本體として漢字又はローマ字を傍に置く、之れアラカン博士譯新約也（明治十七年發行）

（註は下瀬加守氏の作なり）

右はバプテリストが日本傳道の初代に於ける努力の一部なり、川勝氏は其の或部分に従はれたり。

事は、宣教師に對しても、邦人傳道者に對しても多大なる勇氣と活力とを與へた。

明治二十七年四月マコーラム氏は門司に轉任し、此の地と小倉とに於て、青砥氏と交互に説教した、兩氏の熱心なる活動は、神國發展の實を擧げ、加ふるに穗坂、澁谷兩氏の補助を得て清瀧學園なるものを設立した、蓋し當時門司には高等小學校の設けなかつた爲めに、良家の子女は喜んで通學し、且つ學費に乏しき青年も普通學の教育を受くるの便宜が與へられたのである。

ウォーレン氏はマコーラム氏が門司に轉住したと同時に福岡に移り、川勝氏亦小倉に在る事僅かに三箇月にして同地に轉じ、共に力を協せて福岡傳道の事に従ふた。



是より先き、二十五年十月頃より若松及蘆屋より此の地に出張し、箕子町に講義所を設けて傳道をして居たが、ウォーン、川勝兩氏の定住するに當りて一層大なる力が注がれるに至つたのである。當時の活動が如何に活き活きして居たかは、次の文章によりて知る事が出來やう。

「是より先一月横濱浸禮教會牧師川勝鐵彌氏を聘用す、同氏は三箇月間小倉に於て熱心布教に従事し、其の後四月居を福岡に移し、一層勇氣を鼓して傳道せられしに由り、未だ開設の日、深からざるも、説教毎に聽衆四十名を下らず如斯神の榮光は衆人の頭上に輝き、福音の花、將に心裡に開らかんとするの季節に向へり、古語に曰く、明月皎々たれば黒雲之を蔽ひ、花爛漫たれば暴風之を害ふと宣なるかな、神の榮光を蔽ひ、福音の花を害せんとするの徒、氏に難

問を試みし事あり、然れ共、氏は温顔能く之を理解し、福音の眞理を教示せられたるを以て、却て彼等の迷雲を排除し、悔悟の心を起さしめたり。又た八月某日、求道者の招聘に應じ、烏飼村の原野に於て説教會を開らけり、此の日炎天如燃、草木凋み、池水涸れ、鳥は樹陰に棲み、牛は路傍に喘ぐ、此時、氏の説教を聞かんとして四方より群集するもの、實に二百餘名に及べり、氏は滿身に熱血を流し、基督の恩寵と人類の隨落とを説くに、其の一言一句は聽者の鼓膜を破り、一舉一動は人心に非常の感動を與へたり、此の時、聖靈の露は萬物に降り、隨喜の涙は袖を濕し、讚美聲裡に閉會を告ぐ、嗚呼、此の大なる集會は一の履歷として見るべきものにして、是より種子の萌出で、五十倍或は百倍の實を結ばん事を常に祈る所なり」とは、之れ鈴木茂太郎氏が門司バプテスマ



教會設立の日に於て讀まれたる同教會經歷の一節である。

斯くして福岡の傳道、着々として偉切を奏し、西町に講義所を設け、英語學會を起す等、活動大いに務むる處あり、菅野氏も亦た九月に至り、蘆屋を去りて福岡に、夫れより蘆屋の傳道は若松より青砥氏が出張せられる事となつた。

マコーラム氏は健康すぐれず、遂に明治二十七年秋歸米の止むなきに至つた氏の歸米を前に控へて、同年十月二十八日、福岡市西職人町七十一番地に門司バプテスマ教會の總會を開らいた、議長川勝鐵彌氏、書記菅野半次氏、議長は先づ開會の主旨を述べて曰く、「今回諸君を招集したるはマコーラム教師歸米に付き、打合せ致し度き事、並に將來の傳道策を研究するにあり云々」と、夫れより各講義所の教勢報告あり、門司鶴原、佐藤両氏、小倉菅野氏、若松青砥氏、福岡川勝氏一次に左の如き議事があつた。

一、毎年兩度の集會を開らく事、青砥氏提出にて説明あり、多數大賛成にて可決、

二、佐藤喜太郎氏を役者に撰ぶ事、免許狀を與ふる事、マコーラム氏提出信仰箇條の試問ありて後、採用することに決し、免許狀を與ふ。

三、執事の選舉をなす事、投票の結果、鈴木茂太郎氏五票にて當選、鶴原五郎氏三票にて次点者と定む。

之れにて散會した。

其の後、間もなくマコーラム氏は歸米せられたので、其の間、門司の傳道は佐藤喜太郎氏によりて支えられた。氏は万延元年一月二十五日生誕、明治十一年



鹿兒島師範學校在學中、教員の中に英學者にして熱心なるクリスチャンが居た親切なる指導を受け、教會にも誘はれた、始め氏は大いに斯教を嫌はれたけれ



佐藤喜太郎氏

共、遂に聖書を研究するに至り、始めて真に信すべき宗教なる事を感じ且つ自己の罪惡をも深く感ずるに至りたれば、明治十二年十一月日本基督教會牧師瀬川氏より洗禮を領した爾後殆んど十箇年間、或は同志社に

或は明治學院に、或は東山學院に普通科、神學科を卒業し、明治二十三年、日本基督教會派の教役者となりて佐世保、其他に傳道した。時は丁度氏が豊後の

日田に傳道して居られた頃であつた、聖書を學ぶ内に計らずもバプテスマの問題に逢著し、仕切りに研究した上に彌々洗禮なるものが意義をなさずして、一編の儀式の爲めの儀式であるに過ぎなき事を感じた、其内に福岡にバプテスト教會と稱する教會がある事を聞いたので、出福して其の宣教師を尋ね、疑問を質し、教訓を請ふた、當時の福岡在住宣教師はウォーン氏であつた。佐藤氏は親切なる指導を受け、遂に真理のある處を認めて、明治二十七年七月マコーラム氏によりてバプテスマを領した。氏は夫より門司へ行き、マコーラム氏を援助し、又た同氏の不在中同教會に働かれた。當時門司に於ては清瀧學園も其の使命を了へて將に廢止せられんとして居た、又た教會は榮町五丁目に設置せられ、鶴原五郎氏等は克く氏を援けて傳道の事に従つたのである。



マコーラム氏歸米の途に就きて間も無くネサン、メーナルド氏宣教師として來任、福岡に住ひウオーン氏と共に宣教の事に従ふた  
 一千八百九十五年(明治二十八年)一月四日、福岡講義所に親睦會を開らき、百有餘名のや、毎週一回づ、博多、久留米及び西町の三講義所に出張傳道をなし、尙ほ凡



妻夫氏ドルナー、ンサネ

來會者があつて、甚だ盛會であつた。此の年川勝氏は福岡より若松に、後藤(青砥)氏は若松より福岡に各々轉任をなし、川勝氏は若松に適當なる家がなかつた爲めに、小倉に住居せられた。

後藤氏は福岡に赴任せらるゝ

そ一年間、遠賀郡赤間町に毎月一回乃至二回の出張傳道をなして、大いに福音の宣傳に勤められた。メーナルド氏は渡來以來約一箇年間ウオーン氏と共に居住して居たが、此の年の秋、小倉に移りて傳道せらるゝ事となつて福音宣傳の事業に従ふた、而して我が九州



衆會の代初トステプバ州九

九州パプテストの傳道區域は追々と。猶ほ幸にしてマコーラム氏も病氣が全快して此の秋、福岡に歸住した。

翌一千八百九十六年(明治二十九年)二月、佐藤氏はマコーラム氏の傳道を補佐すべく福岡に來任、全年五月ウオーン氏は菅野氏と共に長崎に轉じ、彼處



擴張せらるゝに至つた。

一千八百九十七年（明治三十年）には福岡市本町に講義所を設け、佐藤氏之れが主任者となり、後藤六雄氏は西職人町に講義所を有し、且つ博多方面に大いに活躍せられた。猶ほ氏は以前より熊本傳道の必要なることを唱導し居られたが此の主張に共鳴するものが漸次増加するに至り、遂に一千八百九十八年（明治三十一年）十月、幸にもミツシヨンの容るゝ所となりたれば、氏は熊本に轉じ、坪井方面に講義所を設置し、更に京町に講義所を増設して専ら傳道の事に従ふた。其の後一千八百九十九年（三十二年）一月、宣教師として渡來したるW H クラーク氏は、福岡なるマコーラム氏宅に在りて日本語の研究、傳道準備の傍、英語聖書講義等を以て傳道し居られたが、ルシル、ダニエル嬢と結婚し

全年十二月二十日熊本に赴任、後藤氏と協力せらるゝこととなつた。氏は一千八百六十四年七月四日、北米合衆國ジョージヤ州オルバニーに生れ、全州ニユーナに於て豫備的教育を受け進んでマーサー大學校並に南部バプテスト神學校を卒業して、宣教師となりて我國に渡來せられたのである。氏は傳道の心熱く福音を傳へずんば禍なりとの信念に動かされ、且つは内外の事情を比較研究する事により、外國傳道、殊に、東洋教化の中心とも云ふべき日本を擇びて其の働を始められたのである。

此の年尾崎源六氏は神學校を一時休學して久留米に傳道せられ、長崎の菅野氏は佐世保に出張傳道を開始せらるゝ等、我傳道界の戦線、大いに擴大を來した。



吾人は茲に九州傳道第一の項を終らんとするに當り過去約十年間の傳道界を眺むれば、宣教師四家族、邦人教役者四名にして、宣教師の他に、按手禮を受けしものは川勝鐵彌氏一



族家兩及士博ン-オウ士博ムラ-コマ

名であつた。又た、組織せられた教會は門司バプテスマ教會一ありしのみで、其の會員數は七十五名に過ぎなかつた。茲に一千九百年（明治三十三年）を以て、我がバプテスト九州傳道の第一期を劃したいと思ふ。

## 第五章

### 九州の傳道第二

第二十世紀は世界の面目を一新すべく、訪れ來つた、我等の傳道も亦た、一新紀元を開らかずには居られない。新世紀初頭の五箇年は、大運動の準備時代と稱する事が出來やう。此の時代に於て、一千九百〇一年（明治三十四年）十月、福岡浸禮教會は組織せられ、又た數名の内外教役者は與へられた。

G F ハンブルトン氏は一千九百年（明治三十三年）の秋渡來し、一千九百〇二年（明治三十五年）三月鹿兒島に赴き傳道を開始した、此の十月小畑貞家氏が之に加はつた。氏は鹿兒島縣の人、安政四年八月を以て生る、明治二十一年三月奈良縣田原本町に於て、聖公會に愛洗入會した、其後感ずる所があつて



明治三十一年五月一日、東京市小石川區インマヌエル教會に於て牧師ハリントン氏よりバプテスマを領した。三十五年、主の召命に應じ、献身以て教役の事に従ひ、鹿兒島傳道に當られた。斯くして九州傳道の範圍は益々擴大せらるゝに至つたのである。

同三十五年五月二十七日熊本浸禮教會が組織せられた。六月には、中山代三郎氏が足利より招かれて門司教會の主任者となつた、又た七月には、尾崎源六氏が佐世保に定住して傳道されることとなつた。氏は慶應三年九月十九日大分縣西國東郡に生れた、明治二十四年醫學修業の爲めに上京し、濟生學舎に入りて學ぶと三ケ年、其の間、明治二十八年二月十八日、東京市芝バプテスト教會に於て、ブランド氏より受浸、教會生活の妙を味ひつゝ、内務省の醫術開業試験

を受くるの準備をなしつゝあつた。將に其の準備の成らんとするに當つて、感ずる所あり、世間には肉體の治療に従事するもの多し、されど精神上的の醫師になるものなきを慨き、献身傳道界に身を挺す、親戚知友仕切に之れを止めたけれ共、ノート類は友人に頒ち、其他は焼却して、明治二十九年九月、横濱バプテスト神學校に入學した。三十二年、一時休學して久留米に傳道をしたけれ共僅かにして歸校、三十四年四月神學校を卒業し、一年有餘を大阪に傳道し、次で佐世保に赴任せられたのである。

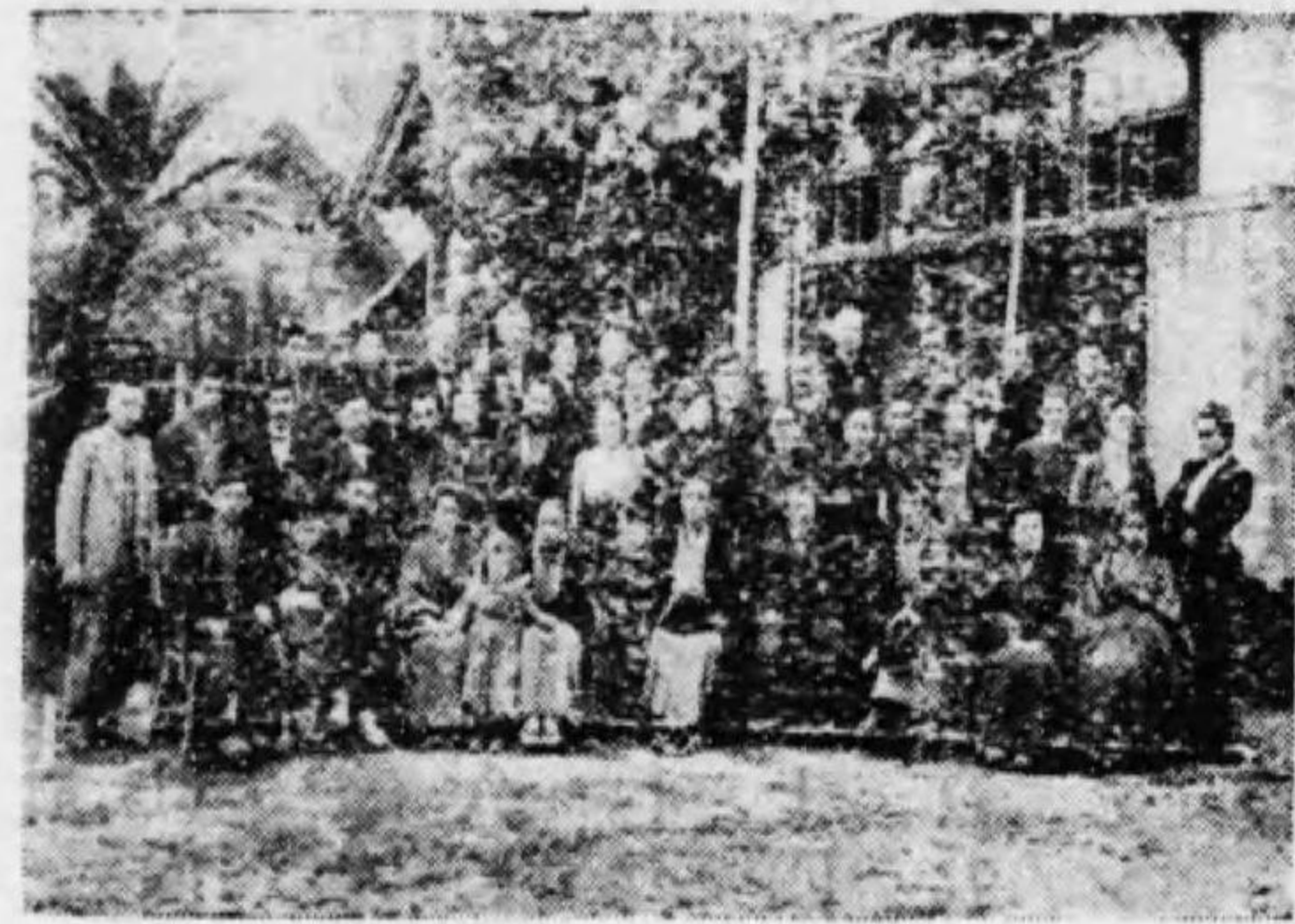
此の年の秋、ウキリングハム氏渡來、又は長崎浸禮教會は組織せられた。斯くて陣容亦た大いに整ふに至つた。

翌一千九百〇三年（明治三十六年）四月二十二、三兩日、福岡に於て、第一



回西南部會は開られた、山口縣並に九州全体の教會七、講義所三より選出せ

られたる代議員總數二十五名にして、議長尾崎源六氏、書記山本熊次郎氏各々指名せられ、會則其他の議事が行はれた、又た、メーナルド氏の説



第一回西南部會



西南部會第一回議長  
尾崎源六氏

教、及び其他の有益なる懇談があつた。

此の年十月の頃より、福岡市大名町マコーラム氏邸に於て、荒瀬鶴喜、稻垣山三郎兩氏の爲めに、神學の教授を開始せられた、斯くて傳道師養成の端緒が開らかるゝこととなつたのである、之れ新世紀を迎へんとするものゝ偉大なる希望を想見せしむるに足る出來事ではあるまいか。

稻垣氏は久留米の傳道を擔任し、毎火曜日午前に出福、土曜日放課後に歸任する事を常とした。荒瀬氏は福岡市中小路町の講義所より通學した。授業は毎週火水木金土の五日にして、教師及び教課目は次の如くである。

組織神學、舊新約聖書講解、說教學

マコーラム氏



教會歴史、英語

佐藤喜太郎氏

新約、舊約聖書緒論

メーナルド氏

説教の方式

川勝 鐵彌氏

此の神學教授は約一箇年半にして廢止するの止むなきに至つた。

全年八月佐世保浸禮教會を組織し全年十一月三日小倉浸禮教會、十一月十二日（又ハ十月とも云ふ、調査不可能なりき）鹿兒島浸禮教會の組織を見る。

一千九百〇四年、（明治三十七年）J.F.レーイ氏來朝す、然るに此の時期の三宣教師は、共に久しく其の使命に従事すると能はずして歸國せられた、一千九百〇五年（明治三十八年）晩春、ウキリングダム氏は夫人の健康勝れざりし爲め、遂に歸國の止むなきに至り、レーイ氏又た活動僅かに二箇年にして歸米、

ハンブルトン氏も亦た、一千九百〇六年（明治三十九年）春、歸國するに至つた。其他、宣教師の休養歸國等ありて、九州バプテスト傳道界は、轉た寂漠を感ぜざるにあらざりしも、一方に於ては神恩益々豊かにして、傳道界は漸やく多事ならんとする。

明治三十八年三月、小倉定住宣教師メーナルド氏は、川勝氏と共に、當時漸く、發展せんとしてあつた新らしき町、八幡に傳道を開始し、須藤千代、村田しな両姉等之れを助けた。同年五月、東山磯男氏來りて八幡傳道の主任となつた。

當時荒瀬鶴喜氏は、横濱神學校を中途にして來り投じた。氏は熊本縣の人、明治六年二月二日生る、明治二十五年頃東京に在りて一クリスチャンの親切を



身に感じ、一方聖書に親しむと共に、他方教會にも出入するに至つた、主として本郷日本基督教會に出席し、又上野ミツシヨンの説教をも聞いた、新らしき、正しき生活を望んだけれ共、身の境遇は之れを許さなかつた、遂に決心して明治三十四年五月一日熊本に於てクラーク氏より浸禮を領し、汽船會社を辭して宣教師の爲めに日本語を教へ、且つ福岡に於て傳道傍々神學を學ぶに至つた、神學教授廢止と共に、横濱神學校に行き、中途退學して來り、長崎浸禮教會の傳道を助くる事となつたのである。

此の年七月、青柳茂氏亦た長崎に來り、身を傳道界に投ずる事となつた、氏は明治十六年九月東京市赤阪區に生る、早稻田中學校在學中、四谷浸禮教會に於て當時の牧師千葉勇五郎氏よりバプテスマを領し、中學の課程を終るや、直ちに組合教會の先輩小崎弘道氏が創設せられたる東京傳道學校に入り、二箇年にして卒業、千葉氏の紹介によりて九州傳道の列に加へられたのである。

全年八月には千葉勇五郎氏も亦た長崎に來つた。氏は明治三年八月十三日仙臺市に生る、明治二十三年六月横濱英和學校卒業後青山學院高等科に入學、二十六年六月卒業して渡米、二箇年間コルベール大學に學び、進んでローゼスター神學校に行き、業卒へて明治三十年歸朝、翌年四谷浸禮教會の牧師となり、東京學院教頭を兼ねられた、明治三十四年十二月四谷浸禮教會を辭任、京都同志社女學校教頭となられた。氏がバプテストに要用なる人物にして、然も他派に在ると惜しみ、ウォーン氏は切に招きて九州バプテストの巡廻教師に聘したのである。



此の年九月に至り、千葉氏を主幹とする雑誌「星光」は發行せらるゝ様にな  
り、菅野、荒瀬、青柳の三氏力を協せて之れに従ふた。

九月二十九日荒瀬氏を主任者として、長崎市油屋町に講義所が設立せられた  
此の年十二月、尾崎氏病氣の爲め佐世保を辭し、佐賀に靜養せらるゝ事とな  
つたので、翌一千九百〇六年（明治三十九年）一月十一日菅野氏其の後を襲ひ  
長崎教會は、千葉氏援助の約束の許に、暫時無牧の儘に残された。されど千葉  
氏は九州各地の巡回に、席の暖まる暇もなかつた。其の頃より、佐世保教會堂  
建築の議は追々進捗した。

此等は以て準備時代の終期となすべきか、將に新時代の曙光と見るべきであ  
らうか。

明治三十九年一月十三日、佐藤喜太郎氏は福岡浸禮教會に於て按手禮を領す  
之れ九州に於て按手禮の行はれたる最初であつた。小倉より川勝、メーナルド  
兩氏、熊本より伊藤武成氏、長崎より千葉、荒瀬兩氏等參集して無事式典は舉  
行せられた、續いて同年四月二十三日熊本浸禮教會に於て後藤六雄氏も亦た按  
手禮を領せられた、會するもの長府より池田清道、若松菊哉、ステッドマン三  
氏、下關より渡邊忠吳、齊藤惣一兩氏、小倉より川勝、メーナルド兩氏、福岡  
より佐藤、蓮尾蓮乘兩氏、佐世保より菅野氏、長崎より千葉、佐々木辰三兩氏  
鹿兒島より小畑氏等參集、盛大に舉行せられた。

病氣靜養中であつた尾崎氏は、三月若松に赴任して靈戰の陣頭に馬を進め、次  
いで八月中山代三郎氏の門司教會を辭任せらるゝや、氏は其の後を繼がれた。



中山氏は其後暫時久留米に働らかれたが、僅かにして傳道界を退かれた。

鹿兒島に於けるバプテスト教會の開拓者ハンブルトン氏、故ありて歸國の止むなきに至つたので、千葉氏其の後を襲ひ、六月赴任せられた、續いて小畑氏も亦た鹿兒島教會を辭任せられたので、荒瀬氏が其の後任となつた。油屋町は青柳氏が働らかるゝに至つた。

全年八月三日、渡邊忠吳氏下關浸禮教會より、長崎に轉じて傳道牧會の事に従はれた。

山口縣萩町に傳道して居られた池田清道氏は、十月中旬渡邊氏の後を襲ふて下關に轉じ、門司の尾崎氏は萩へ、熊本の後藤氏は門司へ、各々轉任し、久しく閑地に在つた小畑氏は熊本に赴任して、此の大移動も終結した。

教界益々多事ならんとするに當り此の年九月二十五日、GWポールデン、C Rドーチャー、J H ローウの三氏相携へて渡來し、傳道界に投じた、彼等は共に北米合衆國、南部バプテスト神學校を同時に卒業し、殆んど同時に結婚して船を同じうして渡來したのである。彼等三夫妻は共に福岡に住居して日本語の勉強をなした、時人此の住居を呼んで「鳩の巢」と云ふた。

久しく祈禱の中に計畫されて居た、九州バプテスト神學校は、其の設立が追々實現せられんとするに當り、明治四十年二月、千葉氏は福岡に轉じて専ら該校創立の劃策を爲した、而して鳩の巢より別れて、ポールデン氏は鹿兒島に赴任、千葉氏の跡を襲ふた。青柳氏は久留米傳道の事に従ふた。

今年の記録に於て忘るゝ事の出来ないのは、神學校の開校と、南部バプテス



ト傳道會社主事ウキリングハム博士の來朝とである。

福岡神學校は、此年十月一日より授業を開始した、校長には千葉勇五郎氏、講師にはマコーラム博士、ウォーン氏、佐藤喜太郎氏ドーチャー氏其の他にして、開校の日に於ては生徒總數七名、極めて私熟的であつた。或は千葉校長の隣家に寄宿舎を置き、或は市内須崎裏町に寄宿舎兼教室を得、或は警固の山上に移り、遂に大名町に地所を求めて、寄宿舎を建築し、暫らく其の一部を教室に用ゐ、追々大講堂を建築する事となつた。

一千九百〇七年（明治四十年）十月十七日の午後、山海の眺望に富める同市西公園の鐘美亭に於て、其の開校式を舉行した。式は千葉校長によりて司られクラーク夫人の玲瓏たる奏樂に導かれて開られた。聖書朗讀、並に祈禱（佐

藤教授）、開會の辭（千葉校長）ありて、折から來朝中なりしウキリングハム博士は大要次の如き演説を爲された。

開校の大切なる場合に臨みて、余は説教者の招致、献身、準備に付いて話したいと思ふ

此の尊き書籍、即ち聖書の内に、五十回も「神の人」と云ふ語が記してある此の語は如何に尊きものではないか、説教者は商人ではない、軍隊の司令官でもない、神の人、神の人、神の人である、諸君！諸君は神の人である事を自覺せられよ。

英國の或る若き少年が、一小紙片に「神は汝を求め給ふ」と云ふ句の記してあるのを見た、其の時に、彼は「我に使命あり」と感じたのである。斯く



して追々生長し、益々神に近くなつた、そして、神は我を求め給ふと信じて居るのである、されば、地位が高くなれば高くなる程、神に近く進んで、遂にかの有名なるロールト、ケーンとなつたのである。而も彼は日曜學校の教師を止めなかつた、某日其の母が「最早日曜學校の教師は止めては如何であるか」と云ふた時に、「我は神が求め給ふのである、されば之を拒む事は出來ない」と云ふたと云ふ事である。

説教者は嚴密なる意味に於て神の人である、神の使者である、然り余は米國の大統領たらんよりも、福音の宣傳者たらんことを庶ふものである。富めるものとならんよりも、余は寧ろ説教者たらんことを庶ふものである、實に余は此の世の興へ得る如何なるものを得んよりも、神の愛を人に傳へたいのである。

である。人が興へたる地位は人に取られる、けれ共、神の興へ給へる地位は權威をもて働らく事が出来る、此の地上に於ける仕事は失敗する事があらうされど吾人の使命は誰れも打消す事は出來ないのである、實に彼は清く、不朽の人である。

人と交るにも信實がなくてはならない、神に召されたる人は、品格に付きて語るよりも、品格を以て語らねばならぬのである、が、品格のみでは不充分である、善き評判の人でなくてはならない、品格は神の見る所、評判は人の見る處である、我等が此の世に居る間は、他人が我等を見て、神を讃むる様でなくばならない、諸君は學校で書物を研究するのみでなく、人に對する道を學ばねばなるまい。



されど若き兄弟よ、説教者として立たるときに種々なる困難があるであらう……神よ願はくば諸君が御前に召さる迄で、祝福を豊かに與へ給はんことを

云々



福岡神學校開校式紀念

次に祈禱（マコーラム博士）獨唱（中野夫人、「夫人は同校の音楽の教授である」）ありて川勝氏の説教があつた。式全く終りて西公園の階段に紀念の撮影をなした。

保、小倉、八幡、門司等を視察し、或は説教し、或は懇談し、或は教會に或は教役者等に大なる奨励と慰安と希望とを與へられたが、十九日長崎を経て支那に赴かれた。



ウイリヤム・ハグ博士

博士は一千八百五十四年五月北米合衆國南カロライナ州ビューフオルトに生る、十九才にしてデョーチャ大學を卒業し、進んで神學校に學び、一千八百七十年牧師となり、一千八百九十三年SBC外國傳道會社に入

りて常に福音の宣傳に心と力とを役せられた、然り而して其の勞苦の餘りに強



かつた爲めであつたらうか、遂に一千九百十四年十二月二十日、六十歳にして天の召を蒙り、安らげき眠に就かれた。博士は日本バプテストの一大恩人である、千葉氏の云へる如く、博士は大きな人であつた、某市の會堂の地を選ばんとして市中を巡視せられたる時の如き、實に市の最も目抜の場所を撰び、人々が高價なるべきを告ぐるや、神の爲めに偉大なる處を撰べよ、役に立つ場所は高價である……と云はれたと云ふことである。又た博士は日本に於ける教育事業に關して曰く「兄弟よ大なる事を計畫せられよ」と、實に博士が神の御用と信じて起つ所には、偉大なる確信が伴ふた。彼は事務の才能に長じた人である若し夫れ其の才能を商業に用ゐたならば巨萬の富を得るに難くなかつたであらう、或は之れを政治に用ゐたならば第一流の政治家となつたであらう、其の

才能を宗教的に捧げ、外國傳道に用ゐたのである、博士は外國傳道の人格化した人であつた。其の子カルダ、ウキリングハム氏が、外國宣教師たらんとの決心を表明するや、「汝が大統領となりしと聞くよりも、今日の決心を聞くを悦ぶ」と云はれたと云ふことである。博士の傳記は令嬢エリザベスWウキリングハム氏の著に成つて居る之れを見る時に博士の風貌に接するの思ひあらしむるものがある、されど此の小冊子の克く盡す所ではない、唯だ我がバプテスト西部組合史は、裏面に偉大なる人ウキリングハム博士のある事を忘れてはならない。

之れより先き、一千九百〇三年（明治三十六年）北米合衆國ケンタツキー州ナシビルなるバプテスト日曜學校局は、我國に於ける聖書の播布、基督教文學



の普及、文書傳道の目的を以て、五百弗を寄附せられたのである。茲に於てカウオーン氏は長崎に福音書店を設け、大いに基督教文學の鼓吹に盡された、其の後、ウオーン氏が福岡に轉せられたので、ローウ氏が長崎に轉じて、書店の經營に當られた。

多事なりし明治四十年は、十一月十五日 P P メドリング氏の渡來を殿として記事を終らんとする。

此の時に當りて、我九州バプテストの状況を見るに、教會 七、講義所三、説教所 數箇所、神學校 一であつた、邦人教役者の數も増加し、宣教師も多く渡來し、今後に於ける活動の準備が出来たものと見る事が出来やう。

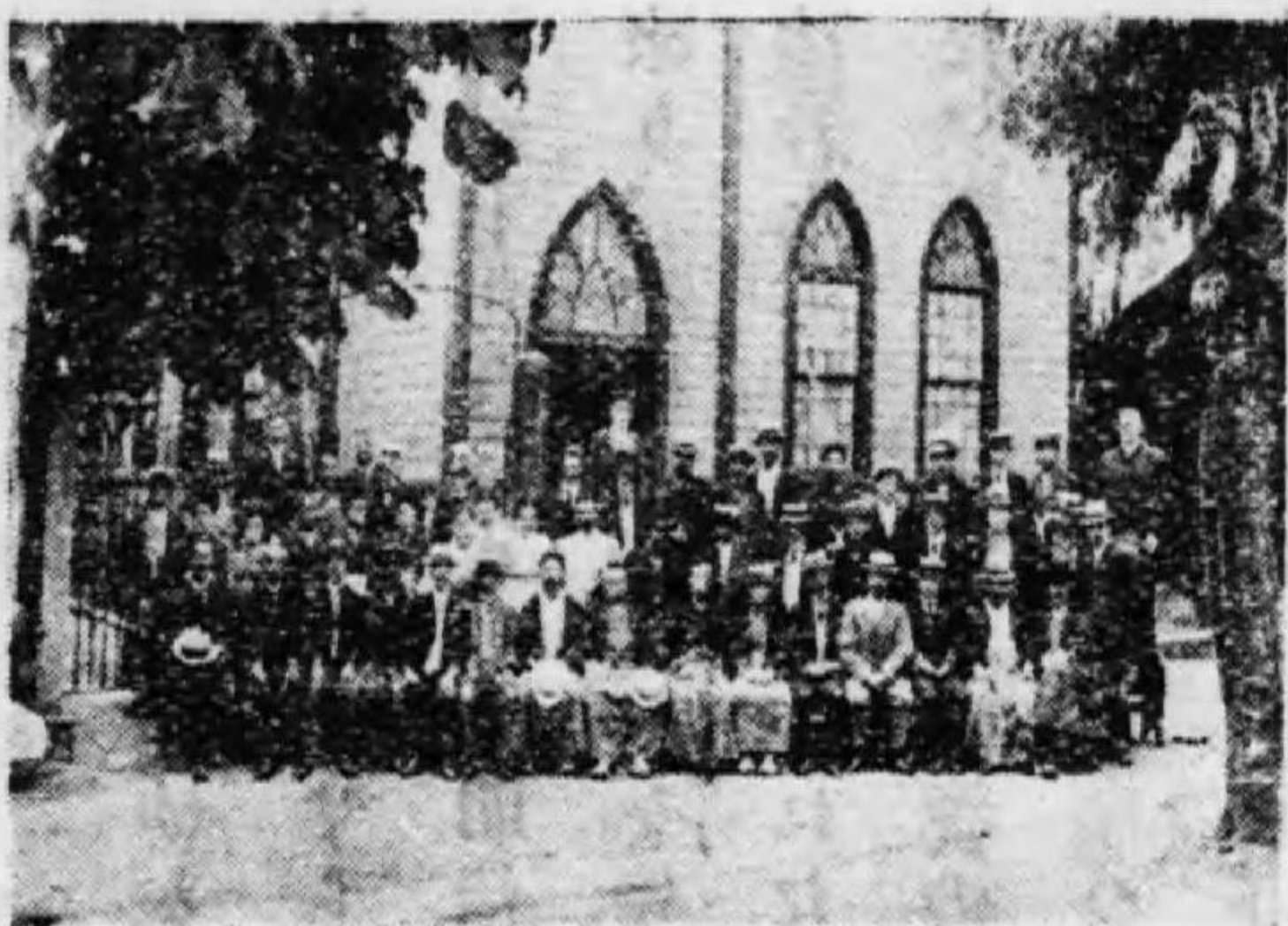
## 第六章

### 西南部の傳道、第一

S B C が日本に於ける傳道は、九州に限られて居たが、其の發展に従ひ、山口縣、廣島縣に擴張せらるゝに至つた。

一千九百〇八年（明治四十一年）二月、荒瀬氏は鹿兒島教會を辭して福岡に來り、神學校に講演を傍聽し、又た「星光」の編輯に従事した、鹿兒島教會には岩永英作氏が招かれた。此の頃、メドリング氏は、小倉在住の宣教師となつた、青柳氏は病氣靜養の爲め一時郷里東京に歸り、久留米は伊藤武成氏によりて繼續せらるゝ事となつた、此の年六月、日本バプテスト組合總會が、初めて九州の地、福岡市箕子町の新會堂に開催せられ、關西、關東、東北の各部會よ





熊本に於ける日本バプテスト教會組合總會

り代議員等多數來會し、僻遠の地なるにもかゝはらず、極めて盛大なる集會であつた。

福岡教會は牧師佐藤氏が神學校教授となられた爲めに、新らしく牧師を招聘するの必要に迫られた藤沼良顯氏を迎ふる事となつた、氏は安政四年十月二十三日の誕生にして、明治十四年九月、横濱に於て川勝牧師よりバプテスマを領した。而してネサン、プラオン氏のバプテスト聖書會社に入りて、聖書翻譯の事に従ひ、明治二十一年六月よ

り、或は信州大町に、或は横濱に、或は姫路に、或は福音丸に轉々傳道せらるる事二十年、多くの經驗と抱負とを携へて、來り我が九州バプテストの中樞たる福岡教會に來任せらる、時正に十月であつた。

此の年(四十一年)秋A B M U外國傳道會社書記長T S バーバー博士と共にA B M U及びS B C兩ミッションの代表者下關に會合し、從來A B M Uが經營して來た山口縣下の傳道を、S B Cミッションに於て引き続き經營すべく、且て廣島縣以西及び四國の傳道を爲すことに談合相整ひ、先づ現に傳道せられつゝある下關、長府、萩を引き受ける事となつた、ミッションは大なる希望と抱負とを以て、之れが經營の任に當り、最も經驗に富める川勝鐵彌氏を小倉より下關に招聘し、下關の牧師池田氏は小倉に轉任する事となつた、長府には當時休養歸省中であつた青柳氏を起たしめて牧會の任に當らせ、ドーチャー氏は下



關に駐在せらるゝこととなつた。猶ほ川勝氏は山口縣下の巡回に多忙であつた爲め、東都に於て唯一の自給教會であつた小石川區柳町の日本バプテスト教會牧師中島力三郎氏を招きて、下關教會の牧師たるを委任した。萩には尾崎氏が居られて、甚だしく困難なる傳道を繼續して居られた。けれ共、晩秋の頃、尾崎氏が盛岡に轉任せられた爲め、同所の傳道は一時中止するに至つた。

下關、長府は共にSBCミッションが九州に傳道を開始したる以前に、己に教會は組織せられて居たのである。特に下關の如き、赤間關浸禮教會として、若松、小倉等の傳道の爲めには、實に母教會であつたのである。いでや、山口縣下のバプテスト教會傳道及び教育の沿革を略述する事と致さう。

時は一千八百八十一年（明治十四年）の春スコットランド聖書會社のJ.A.タ

ムソン氏が四國巡回の途、徳島に於て基督教研究の希望者あるを發見し、暫時其處に止まりて講義所を借り入れ傳道することに至つた、氏が引き擧ぐるに當りて、H.H.リース博士は之を繼續した。之れ、我がバプテストが、日本西南部の傳道に著手した最初である。明治十五年には神戸の傳道が開始された。

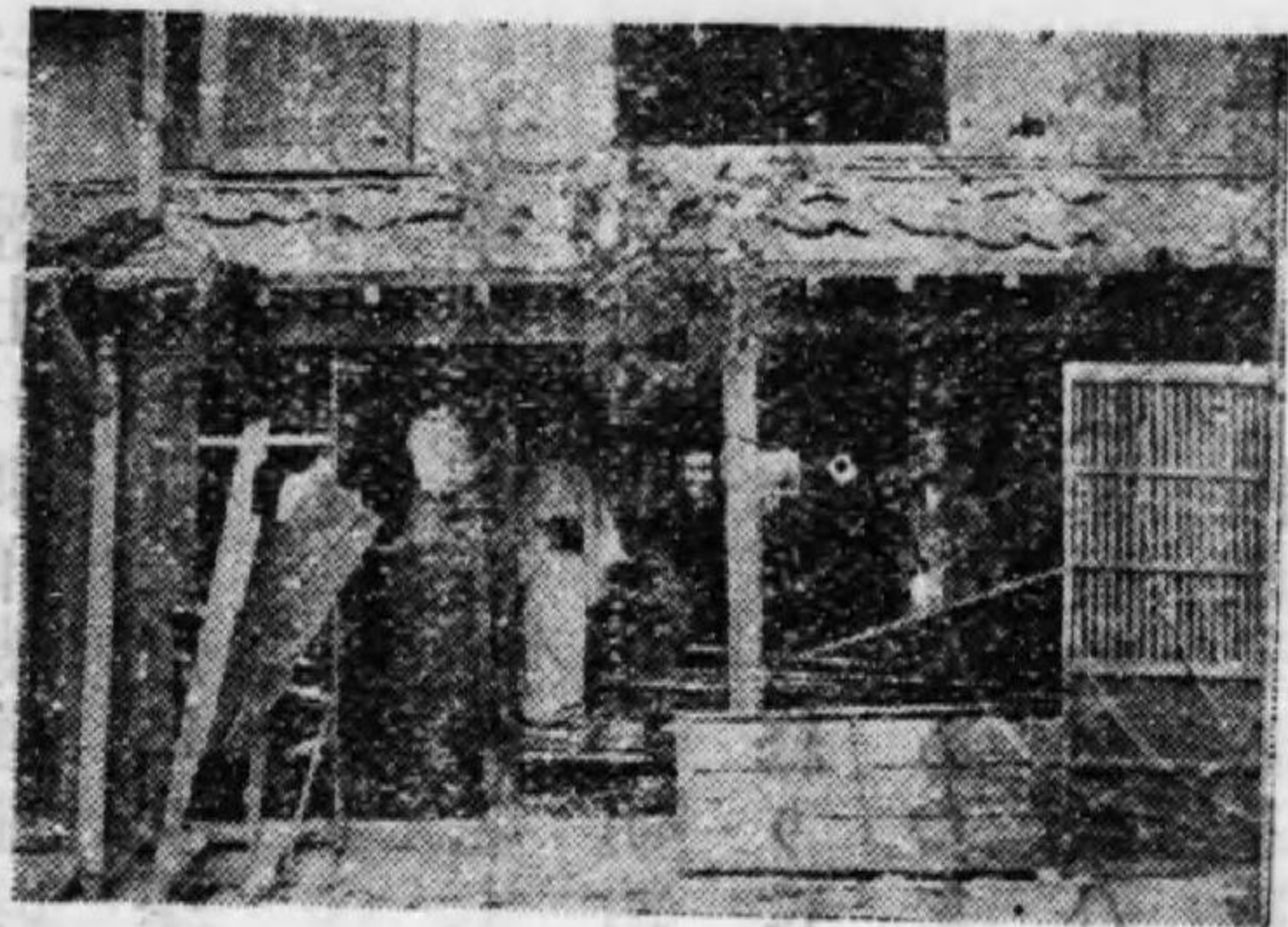
一千八百八十四年（明治十七年）十一月アメリカ聖公會の宣教師として支那に傳道して居たG.H.アツプルトン氏はバプテスト教會こそ眞の教會なる事を感じ上海に於てバプテストマを領し、猶ほ勉學の目的を以て神戸に來た、暫らく姫路に働らいたけれど、僅かにして茲を去り山口縣の傳道に志した。一千八百八十六年（明治十九年）一月、山口縣宮市に居を構へた、之れぞ我バプテストが山口縣下に傳道を開始した最初である。間もなく此の地を去つて、同縣下三田



尻に移り、又た下關に移つた。時は一千八百八十六年（明治十九年）の夏であつた。氏は非常な活動家であつて、下關に居を構へつゝ、長府、山口、徳山、萩の各町に傳道を開始した、されど、其の健康を害し、一千八百八十八年（明治二十一年）三月遂に歸米の止むなきに至つた。翌年十一月二日 T E シーエム・カー氏渡來、實行委員の推薦により、一箇年間神戸に於て日本語の勉強をなしたる後、下關に居住せられた。一千八百九十年（明治二十三年）春、其の家族の健康の爲め、仙臺の R L ホルサー氏が來りて働を共にする様になつた。此の年ミス H M プラオンは、同じく仙臺地方より來りて居を長府に定め、山口縣下の傳道に當り、特に婦人及び兒童の爲めに働られた。又たエレン、シーヤランド夫人も横濱より來りてミス、プラオンと働を共にして、地方教化の爲めに大いて働られた。一千八百九十年の秋、A B M U の内務書記たる H C メービー博士が東洋傳道地の視察に來た時、其の一行と共に渡來したミス、オリブ M プラントは長府に女學校並に孤兒院を創立するの使命の爲めに派遣されたのである。

女學校は美德と命名し、又たハインリツヒ、メモリアル、ホームとも云ふ。一千八百九十一年（明治二十四年）四月一日に開校、最初の生徒は僅かに二名であつた、一年の終りには五名となり、第二年には十名となつた、其の内五名はクリスチャンであつた。其の後多くの生徒が與へられたけれ共、彼れ等が多數の家庭は基督教を嫌ひ、教會の傳道事業と共に、本縣下に於ては、基督教の宣傳の甚だ困難なるを感ぜざるを得なかつた。





明治三十四年五月頃、於ては、其の健康を害して歸米し、其の後任T.E. ストローリー氏が來任した。其の健康を害して歸米し、其の後任T.E. ストローリー氏が來任した。其の健康を害して歸米し、其の後任T.E. ストローリー氏が來任した。其の健康を害して歸米し、其の後任T.E. ストローリー氏が來任した。

一千九百九十二年（明治二十五年）十一月ミスF.A. ダフイーールドが渡來して、長府に滞在し、傳道を働けた、氏はミセス・ホルセーの妹である。翌年シユーマーカー氏が健康を害して歸米し、其の年ホルセー氏も歸米し、其の後任T.E. ストローリー氏が來任した。

西部支那の宣教師であつたけれ共、家族の健康上日本に來り、此の地を選まれ

たのである。其の他、健康の爲めに長府の宣教師となつたものがあるけれ共、此處に記するす價値を認めない、斯くして山口縣の傳道は始められ、又た繼續せられたのである。

一千八百九十四年（明治二十七年）下關市田中町に會堂を建築し、同市の傳道は着々として進歩しつゝある。

山口縣下に於ける傳道は、明治四十一年S.B.C.に引き渡されたる當時に在りては、下關、長府、萩の三箇所にして、女學校は燃焼して、荒蕪に委ねられたる敷地を殘すのみであつた。

日本人教役者の活動に關しては、余の調査した範圍に於ては、記録の見るべきものがない、けれ共、鈴木任、吉川龜、若松菊哉、渡邊忠吳の諸氏が大きい



活躍せられたる功に對しては、神の國に記録に記されて居る事を信じて居るものである。

此の年、八幡講義所の主任傳道者東山磯男氏辭任、荒瀬鶴喜氏は其の後任として赴任せられた。翌一千九百〇九年（明治四十二年）一月三十日、孝明天皇祭の日を卜して、同講義所は教會を組織するに至つた。

SBC日本傳道の開拓者として、明治二十二年我國に渡來して以來、偉大なる心勞と辛酸とを嘗めて、傳道上計るべからる効果を與へたるマコーラム博士は、遂に健康を甚しく害し、歸米の止むなきに至つた。

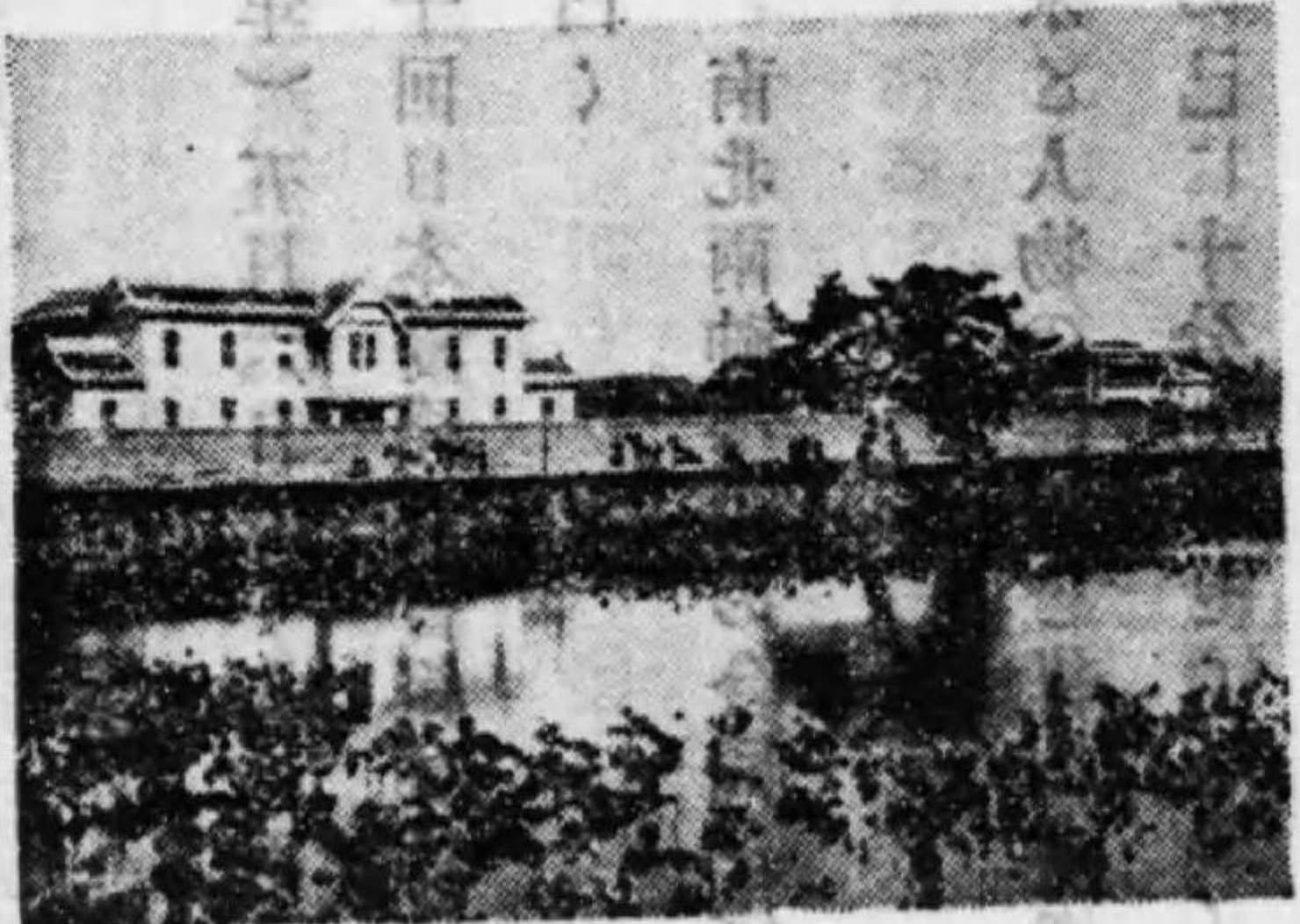
久しく九州に在りて久留米、佐世保其他に轉戦して、神の御用を務め、又た西南部會の開始せらるゝや、第一回の議長として内外上下に信望のあつた尾崎

氏は、萩の傳道を辭して盛岡に牧師となられたが、此の年十月、中島氏の後を襲ひて、下關教會

の牧師となられた中島氏は前にも記したるが如く、日本

バプテスト教會の牧師であつたが、東京市神田區三崎町に中央會館の建

あつた。長府教會の青柳氏は、時しも母教會なる、東京市四谷浸禮教會が無牧



福岡神學寄宿舎

神田區新石町にあつた東京第一浸禮教會を合併して中央バプテスト教會を組織して、會館を集會場とした、其の爲め、一時下關教會の牧師となられたが、間もなく中央バプテスト教會の牧師となつて東京に歸られたので



となつた爲め、其の牧會の任に當るべく、此の年十二月下旬、辭職上京せられた。中...

此の年(四十二年)五月六日より八日まで東京市なるバプテスト中央會館に開られたる、第十回日本浸禮教會組合總會に於て、南北兩神學校の合併問題は提出せられた、曰く

●第三號議案、南北兩神學校の合同を宣教師會に建議する件、

提出者 石川保五郎君

【理由】時代の要求と人物の融通と維持費の經濟なるとは合同の必要を迫り、來れる事、諸君の己に十分知悉せらるゝと信ず敢て本案の通過を望む。

丑○決議の原案可決、

斯くして突差の間に提出せられ、可決せられて、辛苦の餘りになれる福岡神學校の爲めには、容易ならざる大問題が生じたのである、此の總會に出席したる代議員數五十二名にして、西南部會より出席したるものは、僅に八名の少數に過ぎなかつたのである。

前翌年六月八日より十日まで、有馬に開られたる第十二回日本浸禮教會組合

總會に於ては、

一、南北神學校合併無期延期の件

西、南部部會より提出

荒瀬鶴壽君の提出理由説明あり



種々の質問より議論百出せしを以て、議長は本問題を後廻しにせんと議場に謀りしに、大多数の賛成者あり、依りて後廻しに決す。

福岡神學校に關係する全部は合併の時期尙早を主張して専ら無期延期を主張した、之れ實に西南部會内一般の世論であつたのである、其の爲めに小部會は十八名の代議員を送つて極力延期を總會に訴へたのである。代議員等は克く西南部の事情を告げて、延期の必要を述べた、而して再び之れが議案として議場に現はれた時は、次の如き運命に會した。

第十五號議案 神學校合併を無期延期の件

出席者 西 南 部 會

【理由】種々の事情ありて實行困難なるにも拘らず、第十回總會に於ては咄嗟

の間には決議せられたり、期の熟するまで延期を望む。

何ぞ其の聲の哀れなるや、強者に對する弱者の位地は、憐れむべきものがある、種々討議の結果

決議 原案否決

四十五名の代議員中、十八名は餘りに少數であつた、又た、延期を實行せしむる爲めには己に時が遅かつた、けれ共、此の議事は慥かに日本バプテスト教會組合總會の歴史に一大汚点を印したのである、如斯場合に於ける決議法として、多數を以て決したる事を正當と認むることが出来るだらうか。何と云ふても、己に決せられたのである、吾人は合併神學校が、神の祝福を受けて發展し



神國擴張の爲めに寄與すべきことを祈らなければならぬ。

此の明治四十三年は我が西南バプテスト教會に取つては、又しても大なる悲哀を味はされた、其は我がバプテスト傳道界の殊勳者、開拓者にして又た實に其の柱石たるJ.W.マコーラム博士が、歸米靜養も其の功を奏せず、北米合衆國ワシントン州シャトルの客舎に永眠せられた事である。

マコーラム博士は一千八百六十四年六月五日生る、二十歳に至る迄で其の兩親の許に在り、八十四年八月十一日ハワードカレッジに入り、二ケ年にして卒業、二十二歳にして聖靈の使命に鞭れつゝ、ルキビルなる南部バプテスト神學校に入學、一千八百八十九年同校を卒業するや、外國傳道會社は日本傳道の事を依頼した、其年九月結婚し、ブランソン氏夫妻と共に

日本に向ふて出發した、十一月五日横濱に上陸してより神戸、大阪に居住し、専ら日本語の學習と傳道の方針を確立するに勤めた、博士の記録の一部に曰く「一千八百九十年十二月二十一日始めて日本語で、日本人の爲めに、日本國で公會の御用に當つた、勿論私は澤山の誤を話したに相違ない、けれ共、人々は私の云ふのを理解した様に見えた、私は少しでも基督の爲めに働らいたことが嬉しい、ア、私は主の爲に働らかねばならない、翌年一月主の聖餐の御用を務めたが一層、主の爲めに働らくべき決心を固め、益々日本人を愛する様になつた、……」と、而して一千八百九十一年十月九州の傳道を南部ミツシヨンに於て擔當するに定まつたので、翌年先づブランソン氏が小倉に來り、博士も亦た次いで來り加つた。初代よりの西部バプテストの活動は、實に氏の働に負ふ



所尠なからざりし事は、本書を翻くもの、直ちに會得せらるゝ處であらう。

一千九百九年春、靜養の爲めに歸國した、けれ共、之れが我日本、氏の愛する國土に對する永別であつたとは……噫、一千九百十年一月二十三日、天なる御父の許へと歸り行かれた。

氏の一個人の寫眞の得られないことは編者の残念に思ふことである

博士は熱烈火の如き傳道者であつた、慈愛に當める牧者であつた、後進を導かんが爲めには私財をも惜まず、傳道の爲めには身命をも輕んじた。某日青年傳道者某氏、博士の宅に宿つた、其の夜、將に半ならんとする頃、博士は青年傳道者の枕頭に立つた、博士は傳道者に教會の問題を告げた、言々句句肺腑より出で、恰も血を絞るが如くであつた。博士と傳道者とは夜を徹して教會の爲

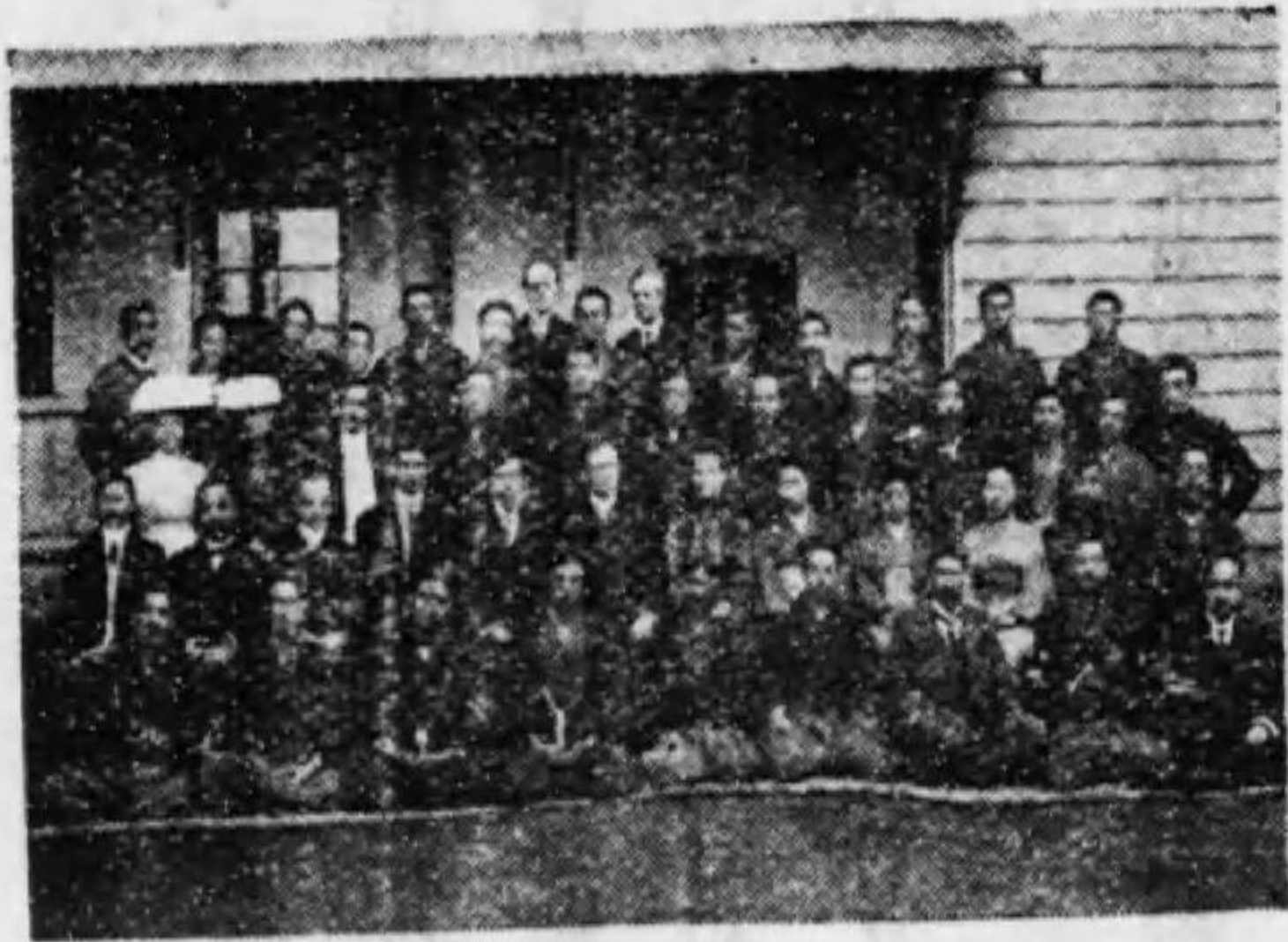
めに祈つた。又た、某年のバプテスト組合總會が、東京市京橋區築地の京橋浸禮教會堂に開られた事がある、其の時、博士は説教者であつた、信徒の責任日本に於けるバプテスト教會の自覺に説き及んで、氏は熱心の餘り、右掌を以て左掌を打つた、打つた！打つた！説教を終つた頃には、掌は赤く腫れ上つて居た、博士は實に傳道の化身であつたと云ふも、決して過言ではない。

博士は我が西部バプテスト教會の基礎をなした一人である、然れども、此の人は遂に永き眠に入つた、熱心なる態度、親切なる行爲、流暢なる日本語、日本人よりも正確で、日本人よりも流暢だと云はれた博士の日本語は耳底に残つて居るけれ共、最早聞く事は出来ない、博士は實に、然り實に日本教化の爲めに殉じたのである。



此の年六月、三人の卒業生は我が福岡神學校から生れた、吉永三次、松島高彰、芥川藤四郎の三氏であつた。吉永氏は福岡に止まつて講義所を開らき、又た夜學校に教へた、けれ共、暫時にして渡米し、現今はサクラメントにあつて商業を營んで居られる。松島氏は一層高等の學問を修めんが爲めに東京に行き早稻田大學に通はれたこともあつたが、之れも暫時にして渡米し、現今は齒科醫となつて居られる。芥川氏は吳へ傳道を開始した、けれ共漸く二年にして辭任し、今は大分縣の某所に公吏の生活を送つて居られる。福岡神學校が出した卒業生の全部が、斯くも傳道會を去つて了つたのには、何か大なる原因がなければならぬ、吾人は此處に其の原因を論せんと欲するものではないが、新らしく設けらるべき神學校が、前車の轍を踐まざらんことを祈るや切である。

此の年の十月には、東京市小石川區表町、傳道院の裏に校舎を借りて、日本バプテスト神學校は生れた、之れ即ち所謂南北合併の神學校である、校長にはパーシユレー氏、教頭には千葉勇五郎氏、教授にはテネー氏、ホ學校となつた。



本日バプテスト神學校開校式紀念撮影

傳道院の裏に校舎を借りて、日本  
ールデン氏、高橋楯雄氏、佐藤  
喜太郎氏等があつて、盛大に開  
始せられた。

福岡神學校に居た學生は笈を  
負ふて東都に向ふた、將に講堂  
が建てられんとして居た福岡市  
大名町の神學校敷地は、空しく  
其の儘に残されて、寄宿舎は夜



## 第七章

### 西南部の傳道 第二

一千九百十一年、(明治四十四年)小倉教會に在つた池田清道氏は大牟田に行きて開拓傳道に従ひ、小倉は福岡より藤沼氏を招聘した、時正に三月二十八日。又た鹿兒島教會の岩永英作氏は若松に轉じ、菅野半次氏其の後任となる。佐世保教會は僅かなる無牧の後、同年四月川勝鐵彌氏を招聘した。六月五日には、ポールデン氏及び神學生喜久田氏相伴ふて、福岡縣嘉穂郡飯塚町に出張、傳道を開始した。

藤沼氏を送つて、無牧の内に残された福岡教會は、新らしく下瀬加守氏を迎へて牧師となした。氏は山口縣の人、明治十年一月一日生れ、明治二十一年四月八日、H.H.リース博士により、山口縣萩に於てバプテスマを領す、明治三十三年五月長府教會の牧師となり三十五年五月渡米、遊學すること五箇年、明治四十年歸朝して神戸バプテスト教會牧師となつた。其の後、東京市にバプテスト中央會館の建築せらるゝや、氏は其の主事となつて働らき、明治四十四年七月、福岡バプテスト教會の牧師とし招聘せられたのである。

南北神學校合併の副産物の一として、A.B.M.U.とS.B.C.ミッションとが、日本に於ける傳道區域を徹廢した、此に於てか、此の年五月五日をトして、東京市小石川區西原町二丁目に講義所を設け、天野榮造氏を主任者として、東都に於ける傳道の第一歩を踐み出したのである。

此の年九月二十三日C.T.U.ウヰリングハム氏再び渡來、十一月十五日小倉に着



し、定住せらるゝこととなつた。

翌一千九百十二年（明治四十五年）吳バプテマトの開拓傳道者にして福岡神學校の第一回卒業生、芥川藤四郎氏は故ありて傳道界を退かるゝ事となつたので、熊本の小畑氏は其の後を襲ひ、軍港市吳に赴いた、而して熊本には川勝氏が佐世保より、佐世保には相良朝彦氏が主任傳道者となつた。氏は南北合併して建てられたる日本バプテマト神學校第一回の卒業生にして今や傳道の初舞臺に立つたのである。同時卒業した黒田政治郎氏は、池田清道氏が永眠の地、大牟田に傳道を営むこととなつた。兩氏は共に本科の卒業生にして、共に將來を囑望せらるゝ青年傳道者である。

其の頃、我が日本國には厚い暗雲が低迷した、即ち明治天皇の崩御である。

明治は大正と變つた。

茲に門司教會の爲め、又た廣く西南部バプテマトの爲めに悲しむべき一事が起つた、其は同教會の柱石鶴原五郎氏の永眠である。氏が九州バプテマトの初穂である事は己に記した通りである。然も、其の信仰終始一貫、常に教會の柱石であつた事は、實に嘆美すべき寶玉である、氏は多忙なる業務にありながら教會の事とし云へば、何を措いても盡すことを怠らなかつた。實に時も財も此の身も靈も神に獻げられたる美はしき信仰の勇者であつた、而も遂に再び起つ能はざるに至るや、氏は病床に在りて教會の自給の基礎を据へた。門司教會は九州に於ける最初のバプテマト教會にして、今又最初の自給教會となつたのである、其の爲めには歴代の牧師が辛苦の活動は申す迄でもなきことであるけ



れ共、其れに優さるとも劣らざる功績は、鶴原五郎氏及び其の他の犠牲的活動  
献身、献財の然らしむる所なりし事は、喋々する必要がない。此より先き後藤  
氏は病氣の爲めに牧會の任を退き暫らく閑地に就くの止むなきに至つた、され  
ば、仕切に後任者を物色して荒瀬鶴喜氏を得た、氏は殆んど自ら建設した八幡  
教會を辭し、大なる決心と希望とを以て門司教會の牧師となつた。時に大正元  
年十一月。

八幡教會は無牧の儘に残されたけれ共、ウキリングハム氏及び地方牧師によ  
りて支われ、二箇月の後、即ち一千九百十三年（大正二年）一月、一時東京  
に行きたる青柳氏を迎へて牧會の事を托した。

當時若松講義所の主任傳道者岩永英作氏の職を辭するに及びて、ミツシロン  
は講義所の閉鎖を斷行せんとした、けれ共、同講義所信徒の諸氏が熱心に存續  
を主張せられたために、試みに繼續せらるゝ事となつた、同所の柱石宮本兼三  
郎氏の如き、甚だしき風雨泥濘の中を跣足にて、八幡に青柳氏を訪ひ、講義所  
存續の爲めに盡力を依頼せられしが如きは、其の一例である。宮本氏が門司に  
在りて信仰の門に入りしは、我九州バプテスト傳道の極めて初期であつた、夫  
れより若松に移り、十年一日の如く信仰の道にいそしむ篤信の士である。最初  
青柳氏は毎日曜日に若松に出張して居られた。之れより先き飯塚講義所は神學  
生の都合のよい時は、學生を以て傳道をしたけれ共、其の他の時は門司より後  
藤牧師が出張して居られた、同氏が休養せらるゝや、小倉より藤沼牧師が出張  
傳道して居られた、けれ共、教勢追々と熟するに及び、專任者の必要を感じた



ので、藤沼牧師は飯塚に轉じ、北海道札幌教會より小野兵衛氏を迎へて小倉教會の牧師とし、搗て、若松講義所の主任を托せられた。小野氏は岩手縣の人、明治十七年十月十七日を以て生る、明治三十八年、仙臺市東北學院專門部文科二年を修業して横濱バプテスト神學校に入り、明治四十二年四月同校を卒業し北海道札幌浸禮教會の牧師となり、大正二年五月同教會を辭し、直ちに小倉教會に赴任せられたのである。

越えて一千九百十四年（大正三年）二月、尾崎氏は下關教會を辭して、若松に來任せられた、斯くて若松は有力なる主任者を與ゑられて、捲土重來、大いに發展せんとして居る、實に祝すべきことではないか、九州バプテスト最初の傳道地、汝若松よ。

下關教會は尾崎牧師の辭任に次ぎて、當地の講義所に主任者であつた守屋吉之助氏が長府教會に轉任したので、同教會は久しく無牧であつたが、同年夏、神學校教授を辭任したる佐藤喜太郎氏を迎へる事となつた。

翌一千九百十五年（大正四年）四月、佐世保に開られたる我西南部會總會の折、西南部教役者會は組織せらるゝに至つた。而して毎年四月及十月に例會を開らき、一月と七月とは東西に別れて開會するの制が建てられ、教役者間の意志を一層疏通し、傳道上に尠なからざる好影響を與へらるべきを信じて居る此の年六月十一日、川勝牧師永眠の訃報は傳へられた、氏は屢々記した如く我が日本國に於けるバプテスト教會最古の教役者の一人であつて、又た我が九州バプテスト傳道の最も初期に當り、新らしく渡來したる宣教師を助け、畫策



其の正を誤らず、克く計り、克く働らいた、其の後進を指導するや、懇切丁寧時には夜を徹して誤謬を校訂するに務められた、又た氏は勢心なるバプテスマであつた、其の主義に忠實なる事、稀に見るの士、其の説教の妙は神に入つて、人の肺腑を貫かざれば止まある。



故川勝鐵彌氏

なかつた。嗚呼氏は其の使命を終へて靜かに天父の聖懷に歸つた、時に年齢六十有六才。惜しむべきことである。

此の年、猶ほ一の悲しむべき事が生じた、其は門司バプテスマ教會の解散である。其の事情に付いて略述する事と致さう。之れより先き、日本基督教會員にして、當時九州鐵道管理局長たりし長尾半平氏、及び其の他の人々によりて門司各基督教會の合同が劃せられた、恰も全國協同傳道は關門地方に行はれ、多數の名士が此の地方に來つて、基督教のプロバガンダを爲したが、門司は其の策源地であつた、此の運動も亦た合同の氣運を促進するに預かつて力あつたことと思はれる。又た門司基督教青年會が其の中心となる事に於て、青年會館の建築も亦た其の合同を容易ならしむる一助となつた、斯くて合同の計畫は益々進んだ。其の間、或は教役者會より、或は西南部會幹部より、或は宣教師より手を換へ品を換へて合同の否を鳴らし、忠告を試みたけれ共、遂に容れらるゝ所とならず、七月二十五日、教會は總會を開らいて合同を斷行する事に決議



し教會は解散して了つた。合同を非とするもの十三名で、内八名は常に教會に出席する人々であつた、彼らは名を失へる會堂に集會を守つて居る、彼らは再び従前の建物によりて、門司バプテスト講義所として、新らしく傳道を開始するとなつた。

此の年十月、幼稚園事業の爲めに、ミス、チャイルス來朝、暫らく東京に在つて準備せらるゝ事となつた、SBC日本ミッションにあつては、獨身婦人の宣教師は之を以て嚆矢とすべきであらう。

又た、此の十一月二十一日、東京市小石川講義所は東京市外巢鴨町一丁目三番地に移轉し、益々神國の擴張の爲めに盡粹する様になつた。

一千九百十六年（大正五年）改信の最初より西部の人として、熱誠なる傳道によりて、神の戰士である荒瀬鶴喜氏は、門司教會の自給を衷心より賛し、多くの物質的缺乏を忍びて、請はるゝ儘に其の教會の牧師となられたが、星霜僅かにして合同教會の出現に逢ひ、多數有力なる會員を失ふて、心樂しまず、遂に門司を去らんことを決心した、而して此の三月九日、但馬國豊岡バプテスト教會の招聘に應じて、赴任の途に上られた。

同年四月十一日、新らたに設立せられたる西南學院の開校式は舉行せられた此は曾て福岡神學校のあつた處で、之に雨天体操場を増築したに過ぎない極めて小規模のものであつた、されど何れは近き將來に於て、一大學府の創設を見得べきものとして、恰も此の地に開られ居る西南部會は、特に祝福の祈を献げた。之れより先き、中等學校創設の議あり、ドーチャー氏専ら其の任に當つ



たのであつた、而して今や其の準備緒に就き、理學士條猪之彦氏を院長に聘して、彌々々開院の運びに至つたのである。

此の日午前十時より開院式は行はれた、「君が代」二唱の後ドーチャー氏聖書を朗讀し、下瀬加守氏祈禱を捧げられた。院長條猪之彦氏は、やをら病軀を起して開院式辭を述べた、次に知事代理、市長、西南學院理事、西南部會代表者等の祝辭があつて、正午式を閉じた、甚だ盛會であつた。

折りしも開催せられて居た我西南部會總會に於てなされたる決議の内に、對組合總會の問題が討議せられた、而して年來の主張を貫徹する爲めに五名の委員を選びて總會に出席せしむる事となつた。即ち佐藤喜太郎、渡邊忠吳、蓮尾蓮乘、小野兵衛、青柳茂の五氏は、其の年六月東京に開られたる組合總會に

出席、部會内の代員後藤六雄、下瀬加守兩氏等と力を協せて其の使命を全ふすることが出來た。即ち毎年組合總會は開られなくても、我が部會は僻遠の地であつて、充分なる出席者を得ることは甚だ困難である、加之、既に決議せられたるが如く、共通問題のみを議するものとすれば、毎年之を開らく必要を認めない、故に之れを二年に一回とし、出來得る丈け多數の出席者を見る方が、總會をして意味あらしむる方法の一である、と信じ、之れを提出したのであるけれども、議容易に容れられず研究委員を擧げて研究を重ねた結果、遂に二年に一回開催の件が可決せられた。

本年四月レイイ氏歸米、ミルス氏又た休養の爲めに歸米せられた。ミルス氏は一千八百七十三年（明治六年）三月北米合衆國ウキスカンシン州ヨーク町に



生る、デモイン大學を卒業してバチエラーオプアーツの學位を受け、爾後十年間教師の職にあつた、氏は我國基督教青年會より招聘せられて、公立中學校の英語教師として渡來せられたであつたが、山口縣立豊浦中學校に教鞭を執て居られた頃、決心をして宣教師の群に加はられ、姫路なる日の本女學校のミス、ヒュースと結婚して福岡に來住、夜學校、西南學院等に教鞭を執り、又た鐵道ミツシヨンと共に、各所の停車場にパイブルクラスを開らいて居られた。

熊本教會は川勝牧師永眠後久しく無牧の内に在つて尠からざる損害を蒙つた外面には某氏の云ふた様に、牧師は居らんでも信者は出來た、けれ共、之れが却つて教會の將來に禍根とはならなかつたのであらうか。其の間牧師招聘の議も容易に進まず、遂に教會の希望によりて、相良氏を佐世保より迎ふる事となつた。時に大正五年五月であつた。

六月には牧野正彦氏日本バプテスト神學校を卒業して下關教會の傳道を助くる事となつた、而して、久しく病氣靜養の必要上、福岡市地行講義所主任として兼ねて福岡教會を援助して居られた後藤六雄氏は、八月より佐世保教會の牧師となられた。

本年度西南部會總會の決議に従ひ、七月下旬より八月上旬に懸けて、渡邊、小野、青柳三氏を委員として教役者修養會を長府に開らいた。講師は小崎弘道千葉勇五郎の兩氏にて、極めて有益なる集會であつた。

此の年十月、東京にありて日本基督教興文協會の爲めに、善き活動を續けて居られたウォーン博士は、ミツシヨンの決議に従ひ、下關市に駐在することとな



つた、従つて、福音書店をも亦た同所に移し、出版頒布を一層盛にせらるゝ様になつた。

同月、條猪之彦氏は病氣の爲め遂に西南學院々長の職を辭するの止むなきに至り、ドーチャー氏は院長の事務を見る事となつた。

## 第八章

### 西部バプテスト

一千九百十七年（大正六年）初頭に於いて特別なる大傳道會が催はされた、謂所金森傳道夫である、金森通倫氏は熊本バンドの一人にして、組合教會の先輩、一時は京都同志社々長をも勤められたが、久しく傳道會を去り、官海の人となり、「貯金のすゝめ」を以て有名となつた、然るに夫人の永眠に動かさ

れて再び傳道界に歸り、日本全體を動かさんとの志望を有する傳道者である。

氏は二月一日より百五十日間を九州傳道の爲めに用ゐんとし、先づ宮崎縣下より始め、熊本、大牟田、久留米、佐賀、佐世保、福岡、下關、長府、小倉、若松、八幡、飯塚、長崎、島原、行橋、中津、大分の順序を豫定し、奉教の決心者を起された、我がバプテスト教會も、宣教師の勧誘と教會の奮起とにより、各派と協同して此の運動に加はつた。奉教決心者は意外の多數に上り、我がバプテスト諸教會に屬するものゝみにても一千名を下らなかつた、されど、其の後の成績に於ては優秀と稱するとは出来ない、金森氏は牧師や教會員の赤坊殺しだと云はれた、某氏は今回の決心者の大部分は月足らずや畸形兒だから育たないのが當然だと云はれた、何れが眞理であるか、余は之れを判定する前に、



我國に於ける基督教の徹底する事薄く、牧師及教會員の力量また足らざるを嘆くものである。さは言へ、氏の集會によりて、基督教の大要を、極めて梗概ながら多數の人々に宣傳するとの出來た事は、偉大なる功果であつたとを信ずる

日本バプテスト教會組合總會は、昨年の決議に従ひ、本年度を九州に開催してより後隔年開會と定められたので、特に委員を選びて準備に當る事となつた

日本バプテスト教會組合第十八回總會は、大正六年六月六日より八日まで、熊本教會堂に於て催はされた、之れ組合總會が九州に催はされた第二回であつた。代議員總數四十一名、甚だ盛會であつた。議事の重なるものは昨年幾多の議論の末に決定した總會を二年毎に一回開らくと云ふのを、三年毎に一回と改正せんとする常置委員の提出である、關東部會内全教會の賛成によるものであつ



熊本花岡山に於ける早天祈禱會

て、大いに主張せられたるが爲め、一方には二年毎に一回でさへ議論のありしものを、三年毎に一回とは餘りならずや、との注意ありしも、遂に成規の賛成を得て議決さるゝに至つた。猶ほ本總會のプログラム中、花岡山の早天祈禱會は特に代議員の興味を引いた、即ち花岡山は我が日本基督教界の歴史に顯著なる熊本バンドが盟約の地であつたのである。

本年度SBCミッションより推薦したる神學生

にして、卒業したるもの二名、江上熊雄氏と鈴木善造氏である、江上氏は福岡



教會の推薦によるものにして、後藤氏を援けんが爲め佐世保に遣はされた、鈴木氏は小石川教會の推薦によるものにして、クラーク氏は八代の開拓傳道を氏に負はせた、即ち組合總會の後、同地に大説教會を開らき、引き続きて傳道するとなつた。又た此の年九月ドーチャー氏は西南學院専務となり、長崎に在たローウ氏は福岡に、ミルス氏は長崎に轉ずる事となつた。

此の年十月三十日より十一月一日まで三日間、大宰府に近き二日市町、武藏温泉場に教役者會を開催す、深く準備せられたる講演や、研究の發表等があつて、甚だ有益なる集會であつた、猶ほ基督教綱領トラクトと稱する金森氏の著述に係る傳道用小冊子が福音書店より發行せられた。

本年は、SBCミツシヨンの最初の日本宣教師ブランソン、マコーラム兩氏及び、續いてウオーン氏が九州に來り、傳道を開始してより二十五年に相當し、之れを紀念せんが爲め部會總會は三項の方法を決議した

#### 記念傳道、記念式、歴史編纂

之れである。各々委員が選定せられて、切に準備を急いだ。

大正六年末に於ける教會數九、講義所七、他に説教所三四箇所、會員總數八百八十五名、現住會員合計三百二十三名、一箇年間の献金總額三千八百圓、日曜學校數二十四、其の教師數百十一名、生徒總數一千七百四十四名に達した。猶ほ現に働らきつゝある教役者數宣教師八家族、邦人傳道者十六名に達した。涙と共に蒔くものは喜びと共に刈り取るべし、只だ吾人をして遺憾に堪ゑざらしむるものは、眞に涙と共に蒔きしマコーラム博士、川勝牧師が此の世に在り



て此の喜びを願ち得ぬ事である、けれ共、ウオーン博士、後藤、菅野、佐藤の諸牧師が健在にして、常に後進の指導と誘液とに任じつゝあるとは、切めても感謝とせねばならない。

一千九百十八年（大正七年）三月十九日午後、福岡に於て紀念感謝會は舉行せられたり。

執行順序左の如し

司會者

青柳 茂氏

一、奏 樂

クラーク夫人

一、讚美歌（三六）

會衆 一同

一、聖書朗讀

渡邊忠吳氏

一、祈 禱

相良朝彦氏

一、讚美歌（四三八）

會衆 一同

一、廿五年史の梗概

小野兵衛氏

一、讚美歌

有志者 合唱

一、紀念の辭

尾崎源六氏

一、紀念の祈禱

後藤六雄氏

一、讚美歌（貳ノ八二）

ウオーン夫人

右は故川勝老牧師が愛唱せしものなり

一、感謝の辭

下瀬加守氏

一、感謝の祈禱

菅野半次氏



一、全

ウキリングハム氏

一、全

山本義麿氏

一、決議文朗讀

佐藤喜太郎氏

決議

我バプテスト教會傳道開始二十五年紀念式典を舉行するに當り、米國南部バプテスト傳道會社に對して深厚なる感謝の意を表し、併而左の二項を決議す  
一、九州に傳道を開始せられたる日を覺え、毎年之れを西部バプテスト紀念日とす

二、今後十ヶ年を以て部内各教會の自給を促進すべきことを期す。

大正七年三月十九日

日本バプテスト西部傳道開始二十五年紀念會

滿場起立を以て可決し

起立の儘にて

一、頌歌 (四六三)

會衆一同

一、祝禱

ウォーレン博士

以上

見よ、二十有餘年の昔、我が九州に傳道を開始してより今日に至る迄で、迫害と闘ひ、困苦を忍び、只だ神の王國を擴張し、人民の福祉を増進し、福音を宣傳するにのみ全力を盡し來りし、老功の戰士、誰れか血涙を以て彼等の經來りし戦功に對して、感謝せず居られ様か。



斯くてウオー博士は請暇歸米の途に付かれた。けれ共僅かに數箇月にして七月上旬歸任せられた。此の年は特に教役者の移動が甚だしかつた、先づ初頭に小野氏の辭職が傳へられ、相良氏が辭職して基督教青年會に赴かれ、蓮尾氏、渡邊氏相次いで青年會へと辭職して赴かれた、されど小野氏は再び傳道界に止まらるゝこととなり、蓮尾氏の後を襲ふて久留米に赴かれた。從ふて二三の移動は餘義なくされた、即ち五月青柳氏は小倉へ、大牟田の黒田氏は八幡へ、佐世保の補助傳道者たりし江上氏は大牟田へ、又た久しからずして八月小野氏は熊本へ各々轉任、久留米は全く棄てられし如く、講義所を閉鎖してしまつた。

又た若松の尾崎氏は此の年十一月二十八日長崎教會の招聘に應じて出發せられた又た宣教師の方面に付いて見るも、ウキリングハム氏休養の爲め六月二十四日任地を出發し、歸米の途に付かれ、ポールデン氏は九月より小倉フキールドを受持たれる事となつた、其の秋、ミス S F フルデヤム、及 N F ウ井リヤムソン氏前後して來朝、東京に止まつて日本語の研究をせられた、曾て南北神學校が合併して日本バプテスト神學校の創立を見たが、僅かに八年にして分立の止むなきに至り遂に此年四月より袂を別つた。

此の秋 S B C 外國傳道會社主事 J F ラグ博士は、東洋に於ける傳道地視察の目的を以て來朝し、二旬餘を巡回視察に費された、而して大體の視察を終へられてから、十月二十三、四兩日福岡バプテスト教會に於て、同博士を中心として教役者會が開られた、其の懇談題目は次の如くであつた。

一、吾人は十年を劃して自給獨立すべく計畫しつゝあれば、充分に補助し、教



會を力あるものとなし、自給せしめられたき事



師教宜及士博アラ

二、戦後の經營として傳道地を擴張し、先づ第一期としては、西部の大都會にして、未だ我教會の設けられざる地方に着手し、進んで日本全國に擴充すると

三、將來建設せらるべき神學校は組織に於て程度に於て充分なる事を要す、且つ有力なる學生を吸収せんとするには、現行制度の改正を要する事も少なからざるを信ず

四、將來の傳道に關しては會堂の建設を必要とす

五、吾人は多數宣教師の來朝を歓迎す、善良なる宣教師の感化は偉大なり、故に將來派遣せらるべき宣教師は、信仰に於て熱心、學識に於て明晰、人格に於て高潔、加之日本及日本人を理解し得る人ならざるべからず。

六、教育事業及社會事業を要所々々に起して、社會との接觸、傳道の發展を期する事。

七、出版事業を盛大ならしむべき事。

八、組合内の組織を完全にする爲め、專任幹事を置く事。

九、宣教師及び邦人傳道者が一層有効なる傳道をなし得る爲め、時間其他に豫猶を與ふる事を努め、且つ充分に修養せしむる事。

其の他、日本に於ける日曜學校事業、特に佛教日曜學校に關しては興味ある



懇談を遂げ、且つ熊本に建設せらるべき女学校の事に關しては、意見の不一致を認めて、意志の疎通を計る等、有益なる會合であつた。

猶ほラヴ博士は朝鮮、支那の傳道を視察して歸米せられた。

此の年七月御殿場に開られたる宣教師會に於ては、部内に教役者扶助會の設立せられん事を希望せられたるが故、幹部の熟議によりて規則草案を作製し部内各教會並に教役者の賛同を得て、組織せらるゝに至つた。

大正七年は極めて多事であつた、組合總會が三年毎に一回開らかるゝ様に決定したので、東北、關東、關西各部會は一團となつて毎年一回年會を開らかねばならぬ關係上、東西に分立するの必要を認め、東部よりの交渉の結果、西南部を改めて西部と稱するとし、我が部會總會は、「日本バプテスト西部組合

と稱するを以て適當となす事の意向を以て、東部と交渉の上決定すべき事を幹部に一任す。」と決議した。幹部は適當なる禮儀と方法を以て交渉したければ、東部は東部年會と稱するに至り、一致の行動を拒絶せられたるが故遂に、決議の如く、西南部會を改めて「日本バプテスト西部組合」と稱するに至つた多事なりし本年を終らんとするに當つて、吾人は悲しむべき記事を挿さなければならぬ、其はC T ウキリングハム氏の永眠である。

氏はロバートJウヰリングハム博士の息にして、一千八百七十九年(明治十二年)三月三日、ジョージヤ州タルボットに生れ、八才にしてバプテストマを受け一千八百九十九年リッチモンドカレッジを卒業してバチエラーの學位を受け一千九百〇二年、南部バプテスト神學校を卒業した。氏が最初に説教したのは



リツチモンド、ベインブリツヂ町教會に於て、十八歳の時になされた、其の題詞は、偶然とも云ふべきか、丁度十年前、氏がバプテスマを受けし時、父博士



故キウリゲンハム氏

の撰びし夫れと同様であつた、曰く「キリスト、イエス罪人を救はん爲めに世に來り給へり」とは信すべく正しく受くべき言なり」と。

氏は一千九百〇二年、神學校を卒業するやミス・ベシー・ベル、ハー

デーと結婚して、其の九月宣教師として日本に渡來した、父博士が、賞揚した様に、氏は大統領たらんよりも遙に善き道を選んで、外國宣教師となつたので

ある、けれ共、不幸にして夫人の健康勝れず一千九百〇五年歸米、間もなく夫人は永眠した、其の後氏は傳道の事に多忙であつた内でも、日本の傳道を忘れなかつた、ドージャー氏が宣教師として日本に來られたのも、實に氏の勧誘に由るものが多かつたと云ふ。一千九百十一年再び交配を得て、リビングストン・ジョンソン博士の息女ミス・フォオイ、エリザベス、ジョンソンと結婚し、復び渡來した。而して小倉に定住して、門司、小倉、若松、八幡、飯塚等を包括する大傳道區に在りて、熱心に宣教の事に従つた。氏は夫人の父ジョンソン博士の記せる如く、大きな體軀にして大きな心の人であつた、氏の心は人類愛の乳にて充ちて居た、氏には他人の爲めに親切をなしたるより幸福な時はなかつたのである氏が小倉に在りし七箇年は、氏の性格の如實に現れた時であつた、



一人として氏を賞讃せぬものはなかつた宣教師も、傳道師も、信徒も、求道者も氏等夫妻の徳を慕はぬものはなかつた、眞に日本を愛する宣教師であつた、宣教師らしい宣教師、傳道を愛する宣教師であつた市井の人々、物賣りに至るまで彼等の徳を讃めた。氏は、兩親に對して孝子であつた、妻に對して慈仁、同情、而して柔和なる夫であつた人類に對しては愛の使徒であつた、實に彼は最高の意味に於てクリスチャン、ゼントルマンであつた。

七年目—安息の年—氏は一年間を楽しく故郷に過ごし、且つ日本傳道の爲めに善き理解と計畫とを得んが爲めに歸國せられた、けれ共、再び日本に歸り得ざる出發とは、神より他に誰れか知り得たであらう。歸國後三箇月にして家兄 B J ウキリングハム氏流行性感胃の爲めに臥床するや、氏は其の病床に待して

看護至らざるなかつた、されど遂に不歸の客となつた、氏は後事万端の整理をなし、リツチモンドに行き外國傳道會社の半年會に出席せんとしたけれ共、遂に同じく流行性感胃に犯されて、夫れを果すことも出來ず、病床の人となつてしまつた。余は左にウキリングハム夫人が編者に送れる書翰の内より、其の臨終の有様を抄録する事と致さう。

彼はリツチモンドに行き、外國傳道會社の集會に出席し、小倉フネールドの用度を要求せんとして居た、彼は病氣の爲めに行く事が出來ず、返つて其の代りにゼームス ウオーカー紀念病院に入院した。彼は此處に出來得る丈けの善良なる醫藥が盡された、二人の特別なる看護婦や、數人の醫者に付き添はれた多くの熱心なる祈禱が、諸所に於て彼の全快の爲めに獻げられた。彼は金曜の



夜から精神の錯亂を來たし、肺炎は追々と重くなつて遂に火曜日の朝四時十分の最後に迄で達した。彼の働は病中を通じて彼の心を領有した、彼は會堂の戸に立つて、手を動かして『何卒ねはいりなさいませ、ごなたでもおはいりなさい、もうぢきはじまります』と日本語にて云ふた、彼はベン（兄）の事を氣にした、彼は海や陸を通つて家郷への旅もした、彼はラヴ博士とも語つた、他の宣教師とも話した、彼は多くの日本の友の名を呼んだ、けれ共、日曜日の夜の事は最も驚くべきものであつた、彼は日本語で美しい説教をした、そして英語でも話した。彼は「かみはわがちから、わがたかき櫓」「いざや友よ、いさみすゝめ」の讚美を唱へ、二度祈禱した、病院の隣室に居たヘール夫人の曰く、今迄で曾て斯くも美しい祈禱を聞いた事がなかつた、と、彼は九州に於ける、

本土に於ける、北海道、朝鮮、臺灣に於ける總ての日本人、又た世界全國の爲めに祈つた、而して世界の平和の爲めに祈つた。斯くて「誰れか祈つて下さいませんか」と云ふた。そして彼の義父が祈る間、眞に静かであつた。

月曜日は一層静かになつて睡眠した、月曜日は終日静かに藥を飲んだ、僅かに其の妻を認識することが出來たけれ共、火曜日の朝早く主エスの聖懷に永眠した。

葬儀はヴァーヂニア州リツチモンドの墓地に營まれた、氏の牧師なるスキネル博士は詩篇四十六篇、九十一篇、及び哥前十五章の一部分を朗讀し第一バプテスト教會の牧師、マクワニール博士は彼の犠牲的生と死を語り死の日を考察し、彼が最後に至るまで主の御働を心の第一に置いた事を説いた。外國傳道



會社の書記B J レー博士が祈られた。

墓に降さるゝ時「主のたふときみことばはゆるぎなき道のもとる………」と歌はれた。而してゼームス博士（外國傳道會社の一員）が祈禱を捧げられ、墓場はいとも美しき花もて飾られた、彼は美はしきハレーウッドなる其の有名な父に近く、最初の妻の側に眠つた。と

多事なりし大正七年は去つた、大正八年は組織變更の時代と云ふことが出来る様か。

一、我が日本バプテスト西部組合内に、新たに教役者扶助會が組織せられた。此は昨夏の宣教師會の提案に基き、常置委員及青柳茂氏が其の綱領を編んで、各教會の意向をたゞし成立の運びに至つたものであつて、此の年一月より

實施、青柳氏臨時其の事務を執つた。

二、本年度年會に於て、西部組合としての新らしき幹部が制定せられた、即ち常置委員を廢して理事制度とし、別に評議員教役者平信徒各二名宛を置く、選舉の結果は

- 氏守加瀬下
- 理事長 下瀬加守氏
- 庶務理事 青柳 茂氏
- 傳道理事 小野兵衛氏



- 教育理事 竹本仲藏氏
- 評議員（教役者）尾崎源六氏、佐藤喜太郎氏



(平信徒) 曾根三治氏、松山守善氏、

と云ふ結果となつた。佐藤喜太郎氏は基督教報に次の如き批評を試みて居られる。

(前略) 第一に重要な改正案は、總會の幹部組織變更に由りて爲された、是迄は常置委員三名に由りて幹部が出来、此幹部が万事中樞となりて教會とミツシヨンの間に周旋の勞を取つたが、今回の改革案では、理事組織となりて四人の理事が選舉せられ、其中一人が理事長となりて、總ての事を管掌すると云ふ重役である、他の三人は庶務傳道教育の部に關係するとなつて居る、理事長は恰も總理大臣格であるから、其の責任は輕からず、其勞は重しと云はねばならぬ、其の重任に就いた下瀬加守君は諸君も知らるゝ如く談懷にして而も

周到の人、先づ適任と評せねばならぬ、適所に適材を得たのを祝する、願くは君が愈々益々其天稟の個性を發揮して、公明正大、眞理の在る所には人を憚らず勇進せられんことを。他の三人の理事は全然新手にて、先づ新進氣鋭の人々其事務に青柳氏當り、是亦熟練周到の人、先づ適材中の適材と評して差支はない、傳道部には小野兵衛氏擧げられた、氏は年壯ではあるが、萬事に抜目のない人、殊に事務には總會中青柳茂氏と伯仲の間にある人である、是も適任者であると云はねばならぬ残る一人教育部には教育家の竹本氏當選せられたから固より本職の御手物申分があらう筈がない、是で先づ四人の理事は適任者を得たと謂はねばならぬ。(中略)

今回の總會の議長としては、多年其椅子に就て熟練周到の聞のある尾崎源六



氏が落選して、新顔の下瀬加守君が當選した……（後略）

右の批評が全然首肯せしむるか否かは別の問題として、其の名が新らしくなつたと共に新らしき人が擧げられ、新らしき氣分が漲つて來たことは事實である、之れも時代の然らしむる所であらうか。

門司教會の石川保五郎氏は此の年六月辭任して京都に赴かれ、此の三月神學校を卒業して小倉にポールデン氏方に居た熊野清樹氏が其の後任者となつた。

氏は明治二十三年十月三日熊本縣飽託郡古町村字宮寺に生る、幼にして人吉に移り、又た熊本市に居住、明治四十年熊本藥學校を卒業して藥學研究生となられたが、止むに止まれぬ傳道精神に動かされ、且つは直接の傳道者として召命を深く感じたので、明治四十二年秋福岡神學校に入り僅かにして、神學校の

依托生となりて、東京學院の中學部に送られ、進んで高等學部、日本バプテスマト神學校に入り、此の年三月同校本科を卒業せられたのである。同時に同校別科を卒業せられたる田中種助氏は、若松教會に赴任せられた、ローウ氏八月中旬靜養の爲め歸米、小野兵衛氏はミツシヨンの留學生として、二年間の豫定にて九月二十九日渡米の航に上られた、其の後任として、青柳茂氏は熊本教會の招聘に應じ、十一月赴任せられた。クラーク氏はミツシヨンの決定に従ひ、住みなれた熊本の地を離れ、子の如く愛する熊本の教會を後にして東京に赴任せられた。

下關にありて佐藤氏の働を補佐して居た牧野正彦氏は病氣靜養の爲め、十一月一先づ傳道界を退かるゝこととなつた。



本年度の記事を了るに當つて、悲しむべき出來事を以てせねばならない、そ



はメドリング氏の永眠である。  
氏は一千八百八十年六月十二日  
故 北米合衆國ミスシッビー河畔テ  
メネシー州ダイヤーに生る、十二  
リドメ 歳にしてバプテスマを領し一千  
グン 九百四年ユニオン大學校を卒業  
氏 し、ビダスブルグ教會の牧師た  
る事一年有餘、外國傳道の志望  
に動かされ、傳道會社の同意を

得て、一千九百七年（明治四十年）九月、日本に來朝、小倉其の他にて日本語の勉強をなし、續いて鹿兒島教會を擔任す。其間會堂の建設、地方の教化に盡力する處尠なくなつたが流行性感冒の爲めに、本年十二月三十一日、午前二時四十五分永眠せられた。

一千九百二十年一月二十日午後四時より鹿兒島教會に於て追悼會が営まれた菅野牧師司式、讚美齊唱、聖書捧讀、祈禱及び履歷朗讀等ありて下瀬牧師の説教があつた、特にメドリング氏が、葬式説教を日本人にと云はれた其の遺志に添ふるものであつて、よく故人が有りし日の面影を偲ばしむるものがあつた、次にドージャー氏は簡單に英語をもつて吊詞を述べられたに對し、メドリング夫人は、答へて曰く「遺兒五人の内誰か來りて父の遺志を繼ぐものゝ起らんと



を希望す」と、偉大なる聲に打たれざるを得ないではないか。吾人は其の實現の日を待つものである。氏は日本を愛し日本人を愛する宣教師であつた、體重二十八貫の偉大なる體軀は、偉大なる人格の殿であつた、されど今は空しく城山の北方に葬られた、彼方には大西郷が眠つて居る。西部バプテスタの宣教師にして、此世を去りしもの已に三人に及んだ、けれ共、日本の土となりしもの氏を以て嚆矢とする。

流行性感冒は世界を風靡して居る、メドリング氏の永眠によりて感せしめられた淋みしさが、未だ新らしい内に、又た、牧野正彦氏の訃音が傳はられた。氏は明治二十一年一月二日福岡市春吉町に生れた、三十七年家事の都合で中學修猷館を中途退學し、職を福岡縣廳に奉ずる様になつた、明治三十八年佐藤喜

太郎氏によつてバプテスマを領し、福岡教會の會員となつた、明治四十年十月福岡バプテスタ神學校の設立せらるゝや、豫科生として入學した、其の後感ずる處あつて上京し、東京學院に入學して中學の課程を踐み、進んで日本バプテスタ神學校に入り、大正五年六月業を卒へ、下關バプテスタ教會の副牧師となつた、翌年好配を與へられたけれ共、僅かにして病氣を得、夫の厚き看護も功を奏せずして長逝せられた、氏は其の頃より健康勝れず、遂に靜養の目的を以て傳道界を辭し別府に繪畫店を開いた、大正九年に入りて店舗も改善を加へ、將來の發展を期し健康も亦た良好に趣いて居た、然るに令兄危篤の招電に接し急遽福岡に歸りて看護に努めたが遂に翌日令兄は逝去せられた。其の間、氏亦た流行性感冒の侵すところとなり、翌二月十七日病床に就き、二十二日午前一



時安らげく永眠せられた年を享くる三十三。有爲なる青年傳道者の永眠を心より悲しまずには居られない。

日本バプテスト西部組合第十八回年會は、四月一日より三日まで、小倉に於て開られた、新らたに年會牧師が擧げられて、年會の靈的氣分を統一する事となつた、第一回に選ばれたるは後藤牧師であつた、氏は年會の標語として「懼るゝ勿れ、慄く勿れ、汝の戰にあらず、エホバの戰なればなり」との聖句を以てせられた。

今回の年會に於て理事制度に變更を加へ、理事長一名及び理事二名とした、當選者は理事長に下瀬氏理事に青柳氏、竹本氏であつた、特に本年會の産物として二つを數ゆる事が出来る、一は日本バプテスト西部組合日曜學校同盟の組

織せられたとであつて、二は五年運動の決議せられた事である。

近年佛教團體なる濟世軍、或は國柱會なるものが、特に北九州地方に於て、基督教の攻撃を事として居た、勿論、基督教會に於ても亦た一般社界に於ても深き注意を拂らう價值を認めなかつた、中にも心あるものは其の態度を仕切に非難し佛教徒の先輩等も眉を擧めて居たと云ふ事である。其の國柱會の人々が、四月の某日、若松に於て路傍演説をして居た、そして仕切に基督教を攻撃し、基督教徒は國賊なりと叫んで居た若松バプテスト教會の田中種助氏は、其の人々に對して、何故國賊なるやと詰問された時に、其の一人が携へたるステッキを以て氏の左眼を刺し、重傷を負はしめた、氏は直ちに病院に昇き込まれて治療を受けた、幸にして數週の内に退院する事が出来た。



三年に一回開らく事となつた我日本バプテスト教會組合總會は、本年五月二十六二十七の兩日間、大阪府堺市大濱商品陳列所に於て開られた、我西部組合よりは下瀬加守、佐藤喜太郎、松永十太郎の三氏が代表者として出席せられ、熊本教會より青柳茂、熊野清樹の兩氏が加はられたので、都合五名となつた。決議事項の重なるものとしては、教役者扶助會の經營に關し、A B M U と S B C と兩ミツシヨンの態度が一致せぬ爲に、東西各組合の經營に任する事、日本バプテスト教會組合に日曜學校委員一名を置く事等であつた。議事中尤も多くの時間を費やしたのは三年一回の總會を隔年一回に改めんとする渡部元氏の提案であつた、之れに對する西部組合代員の意見を一括すれば、大正五年に於て、我が組合より提出した議案は即ち隔年一回であつた、然るに一度も實行されな

い内に大正六年度に於て、常置委員は關東部會内各教會の賛成を得て總會を三年に一回開催する事に提案したのである、吾人は其の時も強いて反對しなかつた、要するに實質ある總會が營めれば良いのである、事務の事は東西各組合に幹部がある、其れに一任すれば足りる、寧ろ總會の氣分を味ひたいものであると云ふに歸した、遂に提案者の撤回によりて決せられた。

此の年、我國に於て、第八回日曜學校世界大會が十月五日より十四日まで、東京市に開催せられ、西部組合より日本バプテスト代表の一人として下瀬加守氏、日本バプテスト日曜學校委員として青柳茂氏、部會代員として江上熊雄氏、曾根三治氏、菅野半次氏、黒田政治郎氏其他の出席者があつた。

此の年婦人宣教師の發起によりて、日本西部バプテスト婦人會同盟と云ふも



のが起された、而して其の第一回總會が、十一月九日より十一日まで、福岡バプテスト教會堂に於て開られた、代議員總數六十名其の他に婦人宣教師、主催教會牧師下瀬氏は勿論、講師として特に招かれたる、神戸の青木澄十郎氏、門司の熊野清樹氏も出席せられた、ドーチャー夫人は同盟の趣意を話された、其一節に曰く「今此の話しを致します時、私は或る恐れを感じます。それは私共の今度の計畫が誠に重大なる意味を持って居るからで御座います。此の集會は神の御旨を成就する爲に學ぶ事、又日本及全世界に於ける靈的要求を明に知り私共各自が協力して愈々かたく基督に結びつくため之等の確乎たる目的を以て開かれたので御座います……」と、吾人は本同盟の健全なる發達を祈るものである。

本同盟の役員は左の如くである

婦人會同盟會長

竹本千代子

全 第一副會長

ドージャー女史 (大正十年六月まで)

ウキリングハム女史 (右以後)

全 通信書記

水町千代子

全 記録書記

古澤しま子

全 會計

下瀬長子

此の年一月ウヰリアムソン氏は熊本に、二月片谷武雄氏は小倉に、各々轉任せられた、片谷氏は明治二十七年十二月岩手縣東磐井郡に生れ、長じて滿鐵東京支社に勤務し居られたが奉仕の念に驅られ、日本バプテスト神學校に入り、



大正八年四月業を卒へて根室教會に赴任、翌年一月同教會を辭して仙臺に來りしが二月小倉教會の招聘に應せられたのであるミス、チャイルスは小倉の新幼稚園の園長となり。ポールデン夫人は舞鶴幼稚園長となられた、ウキリングハム夫人は此の九月に單身來朝せられ、ウワン博士は靜養の爲めに歸米せられたミス、セシル、ランキヤスターはウキリングハム夫人と共に來朝せられ、相共に下關に居住せられた。

五年運動は大正九年四月、小倉に於て開られたる我が西部組合第十八回年會の偉大なる産物であつた。時は正に年會の終らんとする日の午前、提案者を代表して青柳氏は其の理由、内容を説明した、之れに續いてウオーン博士は賛成演説を試みられた、博士は新時代の新機運に乗じて大いに躍進し、神の榮光

と人の救との爲に、時も寶も此身も靈も捧げ奉るべき事を以てし、且つ米國七千五百萬弗運動に於ける献金の狀況を語るゝや、聲涙共に下つて、議場は靈力に震動し、博士の降壇せらるゝや、祈禱の聲、會衆の口を突いて起り、議場は祈禱の筵となり、献身を誓ふ聲、不熱心なりしとの自覺に湧く悔改の呼號眞に之れペンテコステの日を想ひ起さしむるものがあつた、直ちに初穂として献金を集めたのに對し、即座に豫約八千八百有餘圓を得た、代議員總數四十有餘名。

此の運動は其の儘理事に其の計畫並に實行を委任した。理事は熟議を重ねたる結果、評議員並に宣教師中の有志を招き、四月二十三日ドーチャー氏宅に相談會を開らいた、然して其の活動に關する綱領を定め、實行委員五名を選んだ